

3. 全学共通科目の科目群・分野の概要

①人文・社会科学科目群 <注：「ILAS^{アイラス}セミナー」は少人数教育科目群の科目として開講される>

(1) 哲学・思想分野

哲学・思想分野科目は、この分野に属する学問諸領域の基盤となる内容を紹介する「基礎」科目と、より専門的で限定された範囲の授業を講義形式で展開する「各論」の講義科目、および教員との双方向的なやりとりの可能な少人数でテキストの講読や研究発表などを行うゼミナール形式の科目（具体的には「〇〇基礎ゼミナール」、「ILAS セミナー」）の三種類に分かれています。

- 「基礎」科目は必ずしも当の学問全体の紹介や体系的な紹介とはかぎりません。「基礎」は初歩的であるということの意味するのではなく、当の学問の基礎・土台となるような根源的な内容を紹介し、その基本的精神を理解してもらうことを目標としています。ただし、まったくその学問の知識をもたない人でも十分理解できるように配慮されています。
- ゼミナール形式の科目は原則的に「基礎」科目と対応していて（たとえば基礎科目「哲学」（Ⅰ・Ⅱ）」に対してゼミナール形式の科目「ILAS セミナー：哲学」（前期）、「哲学基礎ゼミナール」（後期）があります）、多くは「基礎」の担当者が担当しています。この授業を履修することで「基礎」科目の内容をさらに深く、教員の個人的な薫陶をうけながら学んでいけるようになっていきます。ただ、関連する「基礎」を履修していなくても理解できるように配慮されています。
- 「各論」の講義科目は「基礎」の内容を深めていく形をとっていて、「基礎」担当者が担当しているものも多くあります。「基礎」科目を履修して興味を抱いた学生の皆さんは、ぜひ履修してください。一部の科目については、関係する「基礎」を履修していることが履修要件になっているうえに、2 回生以上指定の科目もあるので注意してください。

(2) 歴史・文明分野

① 日本史関係科目の分類

日本史関係科目は、日本の歴史理解に関する基礎的な内容を取り上げる「日本史Ⅰ・Ⅱ」と、より限定されたテーマを取り上げる「日本史各論」、および少人数で講読・研究発表などを行う「基礎ゼミナール」（前期は ILAS セミナー）で構成されています。

「日本史Ⅰ・Ⅱ」は、大局的な視点から日本の歴史を概観するものです。担当者の専門によって、取り上げる時代・テーマが異なっていますので、内容についてはシラバスで確認してください。「基礎ゼミナール」（前期は ILAS セミナー）も、研究入門的な性格の科目です。これらの科目は、理系学生や、高校段階で日本史を履修していない受講者にも配慮する内容となっています。

「日本史各論」は、テーマがやや絞られており、なかには専門性の高い内容もあります。しかし、その分、日本史の研究における分析手法や考え方を、直接的に学ぶことのできるものとなっています。内容についてはシラバスで確認してください。

② 東洋史関係科目の分類

東洋史関係科目は、「基礎」科目の「東洋史Ⅰ・Ⅱ」（それぞれ前・後期開講）と「各論」科目の「東洋史基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」に分かれます。基礎科目の「東洋史」は、おおむね「古代～中世史」、「近世史」「近代～現代史」に分けて開講されます。詳細については、シラバスを参照していただきたく思います。高校段階で世界史を履修していない人にも配慮した内容となっていますので、各人の興味と関心に応じて積極的に履修してください。

各論の「東洋史基礎ゼミナール」（後期開講）は、少人数授業の形式を取ります。テーマが多少絞られていたり、若干専門性が高かったりすることもあるでしょうが、世界史の教科書とかけ離れた内容ではありませんので、果敢に挑戦していただきたく思います。少人数で行う文献講読やゼミ形式の授業では、受講者の主体的な授業参加が求められます。その分、厳しい要求をされることもあるでしょうが、それは必ずや皆さんの成長の糧となるはずです。

なお、後期開講の「東洋史基礎ゼミナール」は、前期開講の ILAS セミナー「中国史の基礎資料」および「東洋史入門」で学んだことを基礎とし、それを発展させた内容を含んでいます。両者を連続して受講することで、より充実した学習を期待することができるでしょう。

③ 西洋史関係科目の分類

西洋史関係科目は、ヨーロッパ社会の歴史理解に関する基礎的な内容を取り上げる「西洋史Ⅰ・Ⅱ」と、時代や地域を限定した各論、および少人数で講読・プレゼンテーションを行う「基礎ゼミナール」（前期は ILAS セミナー）で構成

されています。

「西洋史Ⅰ・Ⅱ」は、原則として、ヨーロッパの固有の文明と文化の起源や成立や発展に幅広くかかわるものですが、担当者の専門によって重点を置くテーマ、地域、時代が異なりますので、内容についてはシラバスで確認してください。また、これらの科目は、理系学生や、高校段階で世界史を履修していない人にも理解してもらえるように配慮します。

各論、基礎ゼミナールは、おおむね時代や地域・国家を特定しており、中には専門性の高い内容もありますが、西洋史Ⅰ・Ⅱと同様に、西洋史学の基礎的な学びが身に着くよう初学者にも十分に配慮しています。その内容についてはシラバスで確認してください。

④ 現代文明論科目の分類

現代文明論科目は、現代文明の課題を思想史の観点から明らかにする「現代文明Ⅰ」と、現代社会に特有の構造・現象をとりあげる「現代文明Ⅱ」で構成されています。狭義の歴史学に収まらない分野横断的な視点から近代国家、ナショナリズム、資本主義の複合的な関係を探る科目ですが、講義は予備知識のない学生にも理解できるように配慮しています。

(3) 芸術・文学・言語分野

① 芸術関係科目の分類

芸術関連科目では、主に西洋と東洋と日本の美術や音楽について、理解を深め、感性を磨くことを目指します。さらに、「美」とは何か、「芸術」とは何か、「創造性」とは何か、といった根本的なテーマについて受講生とともに考えていく科目構成になっています。

「基礎」は、「芸術学Ⅰ・Ⅱ」、「音楽芸術論Ⅰ・Ⅱ」、「東洋美術史Ⅰ・Ⅱ」からなります。「芸術学」では、古代から現代までの具体的な芸術作品や美学思想を分かりやすく解説しながら、アートに親しんで感性を磨いていく内容になっています。「音楽芸術論Ⅰ・Ⅱ」では、作品鑑賞等を通じて音楽の歴史と魅力に迫り、「東洋美術史Ⅰ・Ⅱ」ではインドや中国等の仏教美術の原点に触れます。いずれも理系系の学生にもぜひ受講してほしい内容です。

「各論」は、「創造行為総論A・B」、「近代芸術論A・B（隔年開講）」、「創造ルネッサンス論A・B」からなります。「創造行為総論A・B」では、芸術と社会の関係をさまざまな観点から考察するほか、芸術や美について著わされた優れた著作を取り上げ、偉大な美の思索家たちの思想に触れます。「近代芸術論A・B（隔年開講）」は明治期の芸術を同時代の社会的背景を踏まえて俯瞰し、「創造ルネッサンス論A・B」ではルネッサンスおよびバロック時代に制作された芸術作品を主に取り上げて表現や技法の特徴を分析し、さらには保存や展示、修復をめぐる問題についても考えます。

「基礎ゼミナール」の「創造ルネッサンス論基礎ゼミナール」では、少人数のゼミ形式で行います。美術作品をただ「見る」ことからステップアップして、注意深く対象を観察し解釈する術を身につけ、情報を言語化する「作品記述（ディスクリプション）」の方法論を学びます。「創造行為論講読演習」では、美学や芸術学の基本文献を外国語で読み込む力を養います。

② 国語国文学関係科目の分類

国語国文学関係科目には、基礎的な内容を中心として、幅広く古典文学を取り上げる「国語国文学」Ⅰ・Ⅱ、同じく近代文学を取り上げる「日本近代文学」Ⅰ・Ⅱ、中国古典文学を取り上げる「漢文学」Ⅰ・Ⅱ、日本語を取り上げる「言学」Ⅰ・Ⅱがあります。「国語国文学」「日本近代文学」は、『万葉集』『古事記』など上代文学の始まりから平安時代の和歌や物語、中世の説話、近世の俳諧、さらには明治・大正・昭和期の文学について、日本語学の知見とも関連させながら入門的講義を行っています。また、日本の文化と日本語に大きな影響を及ぼした中国古典文学をカバーする「漢文学」は、高等学校で用いられたなじみある教材を用いた入門的講義で、より深い理解を獲得することを目指しています。

「言学」は、日本古典文学の知見を踏まえた、日本語に関する入門的講義です。いずれも、理系学生にも配慮した内容となっています。

より限定されたテーマを取り上げる「各論」科目には、日本や中国の専門書・古典を読む「日本語学文献講読論」Ⅰ・Ⅱや「日本古典講読論」Ⅰ・Ⅱ（いずれも2回生以上向け）などがあります。中には専門性の高い授業もありますので、その内容・履修条件についてはシラバスで確認してください。

後期開講の「日本近代文学基礎ゼミナール」は、前期開講のILASセミナー「日本近代文学」ともども、少人数で講読や研究発表を行うゼミ形式の授業であり、受講者には主体的な授業参加が求められます。

③ 言語関係科目の分類

言語関係科目は、言語を人間の思考とコミュニケーションの主要なツールと考え、思考とコミュニケーションのプロセスとメカニズムを解明し人間性の理解に迫ることを目標に、次のように体系化されています。

「言語科学Ⅰ」・「言語科学Ⅱ」では、入門的な内容ながら、音韻論・形態論・統語論・意味論・語用論・異文化間コミュニケーションおよび言語教育への応用といった、言語学の主要分野を網羅的に扱います。これらに続くものとして、

2 回生以上向けの「言語構造機能論」・「言語比較論Ⅰ」・「言語比較論Ⅱ」・「言語認知論」が提供されています。いずれも、ことばに関する知的関心に沿った、わかりやすい授業内容ですが、自身の興味に応じた中身かどうかはシラバスで十分に確認してください。担当教員と事前に（あるいは初回の授業時に）相談してもらうことが望まれます。

(4) 教育・心理・社会分野

① 教育学関係科目の分類

教育学関係科目は、基礎的な内容を中心とする「基礎」としての「教育学Ⅰ・教育学Ⅱ」と、より応用的なテーマを取り上げる講義科目や、少人数で講読・研究発表などを行う基礎ゼミナール（「教育学基礎ゼミナール」と「ジェンダー論基礎ゼミナール」）からなる「各論」で構成されています。

「教育学Ⅰ」は、長い射程で教育そのものを論じながら、教育を見る眼を鍛えていくことをめざしており、「教育学Ⅱ」は、現代教育が抱えている国内・外の諸課題の把握・理解をめざすものです。「教育学Ⅰ・教育学Ⅱ」を担当している教員は、教育社会学・教育史・教育哲学を専攻しており、それぞれの学問の方法論にのっとり教育という事象を考察しています。学問的な方法論の違いによって授業内容は大きく異なりますので、詳細はシラバスで十分確認してください。教育は学生のみなさんにとって身近なテーマであると思われかもしれませんが、教育現象を学問の対象とすることの意義とそのためにも不可欠な理論や方法への理解を深めることが、教育学のめざすところです。

「各論」の講義科目は、テーマがやや絞られており、専門性の高い授業もありますが、興味をもった科目については、内容をシラバスで確認した上で、積極的に受講してください。また、「基礎」や「各論」には英語講義も複数存在しますので、これらの受講にも果敢に挑戦してください。

基礎ゼミナールは、教員と学生との間での双方向的なやりとりが可能な少人数で行うもので、受講者には主体的な授業参加が求められます。ゼミ形式で報告と討論を行い、そのことを通して、教育学やジェンダー論のより深い理解ならびに問題意識の醸成をめざしています。なお、基礎ゼミナールは後期に開講されていますが、前期には教育学関係の ILAS セミナーとして「教育・社会・国家」「ジェンダー論」が開講されています。ゼミ形式の授業に興味がある人は、基礎ゼミナールだけでなく、これらの ILAS セミナーを履修することも推奨します。

② 心理学関係科目の分類

心理学関係科目は、心理学に関連する幅広いトピックの中から、心理学を学んだことのない学生にも興味・関心を持てるようなものを選び、入門的に概説する「基礎」科目、心理学の各分野別に体系的に基礎内容を解説していく講義と、演習形式でしか身に付けることのできない心理学的思考法・方法論等を学ぶ基礎ゼミナールからなる「各論」科目、および ILAS セミナーという「少人数」科目の3種類からなります。

「基礎」科目では、心理学という学問分野の幅広い問題領域（ないしは応用領域）に触れてもらうとともに、心理学の基本的な考え方を理解してもらうことを目標としています。心理学は、生物としてのヒトを対象とする心理学と、人生を生きる人間を対象とする心理学に大別することができますが、心理学Ⅰは前者に、心理学Ⅱは後者に、大まかに対応しています。

「各論」科目は、講義と基礎ゼミナールからなっています。講義は、講義担当者が専門としている分野に関する基礎的な内容を扱う講義であり、その分野の基礎的な知見から最先端の研究動向までを見据え、その分野の一通りの体系に触れてもらうことを目標としています。基礎ゼミナールでは、演習形式で、心理学の各分野の研究法を学んだり、心理学的思考法を応用して関連する諸現象を分析したり、文献講読を通じて最先端の知見を学んだりすることができます。各担当者の開講する講義と基礎ゼミナールは基本的に対応していますが、それぞれ独立して履修することができるように配慮されています。

「少人数」科目は、ILAS セミナーであり、基礎ゼミナールと同様、少人数の演習形式で心理学の各分野の入門的内容を実践的に学ぶことができます。

心理学は、対象に関しても、方法論や研究スタンスに関しても、きわめて幅広い分野です。授業の詳細をシラバスで確認の上、ぜひ多様な「心理学」を履修してください。

精神分析学・精神病理学関係の科目のうち、精神分析学関係の科目は、歴史的展開を踏まえて精神分析の基礎的な考え方を学ぶ「精神分析学」と、精神分析の考え方を応用しながら芸術や集団心理を理解する「精神分析Ⅰ・Ⅱ」、また、研究的接近のとは口となる「精神病理学・精神分析学講読演習」とから成ります。

また、精神病理学関係の科目は、精神疾患からの社会復帰の課題を考える「行動病理学Ⅰ・Ⅱ」、研究的接近を講読によって試みる上記の「精神病理学・精神分析学講読演習」とから成ります。このうち「行動病理学Ⅰ・Ⅱ」では、複数部局と非常勤講師の協力のもとに、共生の理念のもとで、現在の精神障害者福祉の在り方に触れます。

精神病理学と精神分析学は、独立した人間理解の体系を成すと同時に、臨床活動において密接な協力関係があり、それゆえ一つの科目群として履修してもらうこととなっています。特に、講読を通じてテーマを見つけてゆくための「精神病理学・精神分析学講読演習」は、単一の講読科目に総合されています。

③ 社会学関係科目の分類

社会学関係科目は、基礎的な内容を中心とする「社会学」（Ⅰ、Ⅱ）、より応用的なテーマを取り上げる「社会学各論」（Ⅰ、Ⅱ）、および少人数で講読・研究発表などを行う「ILASセミナー：社会学」（Ⅰ、Ⅱ）、「社会学基礎ゼミナール」（Ⅰ、Ⅱ）で構成されています（「ILASセミナー：社会学」は少人数教育科目群に属します）。

「社会学」は、社会学理論の基本的な概念と学説を紹介する「社会学Ⅰ」（前期開講、計5コマ）と、それらの基本概念・学説に基づく社会学の経験的研究を幅広く紹介する「社会学Ⅱ」（後期開講、計5コマ）から成ります。いずれも、大学で初めて学ぶ社会学という学問の基本的な視点や発想の意義、またそれによって現代社会の現実をどのように「常識」を超えた観点から捉えることができるかということ、理系学生も含めた初学者に体得してもらうことを目標としており、（高校の公民科などの）特別な予備知識は必要としません。

「社会学各論」は、「社会学各論Ⅰ」（1コマ）が前期に、「社会学各論Ⅱ」（1コマ）が後期に、それぞれ開講されます。これらは、「社会学Ⅰ」の応用として、「社会学Ⅱ」よりも領域を限定した）社会学の専門的研究を、やや深く掘り下げて紹介します。具体的な内容は年度によって変化しますので、内容および履修条件についてはシラバスで確認してください。

少人数科目は、「ILASセミナー：社会学Ⅰ」「ILASセミナー：社会学Ⅱ」（各1コマ）が前期に、「社会学基礎ゼミナールⅠ」「社会学基礎ゼミナールⅡ」（各1コマ）が後期に、それぞれ開講されます。いずれも少人数でテキストの講読や研究発表を行うゼミ形式の授業であり、受講者には主体的な授業参加が求められます。前期に「ILASセミナー：社会学」（Ⅰ、Ⅱ）を履修した学生は、後期に「社会学基礎ゼミナール」（Ⅰ、Ⅱ）を続けて履修することで、より学修を深められるように計画していますので、もし可能であれば前後期連続した履修を推奨します。扱うテキスト等は年度によって変化しますので、内容についてはシラバスで確認してください。ただし、いずれも社会学の初学者を対象としており、特別な予備知識を必要としない点は、「社会学」と同様です。

※「日本観照：多文化環境で学ぶ現代日本社会の諸相」は、人文・社会科学科目群日本理解分野「Current Issues in Japan I」との合同授業として実施されます。

(5) 地域・文化分野

① 人類学関係科目の分類

人類学関係科目は、文化人類学および下位分野の一般的な内容を講義する基礎論（文化人類学Ⅰ・Ⅱ、生態人類学Ⅰ・Ⅱ等）、より限定的な内容を講義する各論（文化人類学各論Ⅰ・Ⅱ、宗教人類学等）の講義科目、少人数で講読や発表を行う調査演習・ゼミナールで構成されています。

講義科目の基礎論・各論ともに、世界各地の多様な環境のもとにある人間の生活を主題としており、知的興味さえあれば文系・理系を問わず、初学者でも受講可能な授業内容となっています。講義で扱う内容は、担当教員の専門により多彩です。そのため、受講希望者は、自身の学習目標を主体的に設定し、シラバスで講義内容を十分に確認した上で、複数の講義科目を選択して履修することが望まれます。

演習・ゼミナールは、講義科目履修者または既修者の受講が望まれます（必須ではありません）。ILASセミナー（文化人類学調査法・社会人類学調査法）および調査演習は、人類学的研究に必須の調査方法であるフィールドワークの基本を学ぶ少人数科目であり、文献講読のほか、調査計画立案、参与観察による資料収集、資料分析と提示の方法を実践的に習得することを目指します。地域研究ゼミナールは、アジアやアフリカ地域における人類学的文献を講読します。

② 地理学関係科目の分類

地理学関係科目は、基礎論としての「人文地理学」、「地域地理学」、「自然地理学」と、都市・村落・歴史地理・地域情報・経済地理あるいは日本・欧米・アジア・アフリカに関して踏み込んで考える各論、そして少人数で行う基礎ゼミナールからなります。これに地理学関係教員が担当するILASセミナーが加わります。

高校までの地理教育は、世界の諸地域について事項を学ぶ科目としてとらえられがちですが、大学で学ぶ地理学科目は、世界諸地域の多様性を重視しつつ、環境と地域文化との関連や文化間の相互作用の考察を通して地域の成り立ちを明らかにするものです。基礎論・各論それぞれ対象や方法は幅広く多様ですが、特色として「地図を読む」、「地図で描く」ことを通じた空間的なものの見方の重視をあげることができるでしょう。

基礎ゼミナール科目は、地図の読解・作成や地理情報の利用などの実習を含むものです。ILASセミナーでは、主に文献講読や受講者各自の研究発表を行います。

③ 環境構成論関係科目の分類

環境構成論関係科目は、建築および建築によって構成される環境（都市・集落）を扱う科目群です。とりわけ建築と環境の歴史とその保全をテーマとしています。世界遺産登録に象徴されるように、わが国の歴史的環境や資源の保全と活用への期待は、今後ますます高まっていくことが予想されます。そうした動きは現在、遺産学という大きな枠組みで

世界レベルの議論へと拡大すると同時に、われわれの身近なまちづくりにおいても必須の要件として認知されるに至っています。環境構成論科目は、その基礎的事項を講じると同時に、最前線の状況を紹介するものです。「都市空間論」が基盤となる内容を扱う基礎論、「都市空間論各論Ⅰ・Ⅱ」などが個別のテーマを取り上げる各論、「都市空間論基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」が少人数で講読・研究発表・見学会などを行うゼミ形式の科目となっています。担当教員の専門によって、取り上げる建物や地域、また研究の視点や方法論等が異なるため、各科目の内容はシラバスで確認してください。

特に必要となる予備知識はなく、理系・文系を問わず履修することが出来る内容となっています。また、各科目は、それぞれ独立した内容となっており、単独での履修も問題はありません。もちろん、当該分野の幅広い知識を得、かつ理解を深めるためには、連続して履修する、あるいは複数の教員の科目を履修することが望まれます。さらに体系的に学びたい学生は、建築系の科目や環境系の科目と併せて履修することをお勧めします。

(6) 法・政治・経済分野

① 法学関係科目の分類

全学共通科目の法学系科目は、広く法学全体の導入・案内をおこなう基礎的・入門的科目（「基礎」）、いくぶん主題や方法を限定して発展的・専門的内容をあつかう科目や少人数での講読・プレゼンテーションを中心にすすめられる基礎ゼミナール（「各論」）の二種類から構成されています。またこれと合わせ、基礎ゼミナール同様少人数でのきめ細かな指導をめざすILASセミナーも提供します。

ILASセミナーは、前期のみの開講です。現代・過去の法律問題、あるいは社会的・経済的・政治的問題にも広く題材を求めつつ、大学での学習全般への手引き（文献資料の探し方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方など）を提供します。人文・社会科学系科目の基本的な学習技術を身につけ、この分野への関心を喚起・発展させる機会として活用してください。

基礎科目・各論科目はいずれも、専門課程において法学を専攻する予定の受講者（法学部生）にとってはその後の法学学習の導入・基礎固めとしての役割を果たすいっぽうで、それ以外の受講者にとっては社会生活上求められる法律に関する基本的な知識と考え方を示すとともに、他の学習分野・学問領域との関連について広い視野を得る機会を提供します。法学それ自体はたくさんの細分化された専門領域からなる広大な学問領域であり、全学共通科目のなかでその全貌を紹介することは不可能ですが、そこに通底する共通の発想や関心のあり方に触れていただき、今後の学習と生活に役立てていただきたいと考えています。

基礎科目は、主として法学についての特別な基礎知識をもたない初学者を前提に、法学学習者に求められる最も基礎的な知識・技術を提供し、特有の発想に親しんでもらうことをめざします。憲法、民法、刑法や民事・刑事訴訟法、行政法、労働法等々個別の法領域だけでなく、六法や判例をはじめとする法情報へのアクセス方法、専門用語に関する基礎的な理解、条文解釈の方法等を提示して、法律・法学への広くバランスのとれた見方を身につけてもらいたいと考えています。

各論科目は、各担当教員の専攻する研究領域に近い内容に特化することで、皆さんの関心に応じた受講が可能になっています（とはいえ、特別な予備知識がなくても受講できるように配慮がなされています）。個々の講義内容は担当教員や開講年次等によって異なるので、くわしくはシラバスで確認してください。

なお、科目・担当教員によっては、指定教科書や参考図書のほかに、六法（『ポケット六法』等のハンディ版）や用語辞典、法令用語の概説書等の携行・参照が求められる場合があります。

一般に法律の世界、法学という学問に対しては、杓子定規で堅苦しいというイメージが付きまといがちですが、実際には、きわめて幅の広い想像力と柔軟な創造力を求められる領域でもあります。法学特有のものの方・考え方に触れることを通じて、皆さんの視野と関心を広げていく一助としてください。

② 政治学関係科目の分類

政治学系科目は、日本をはじめとする先進国における政治の実態や歴史、あるいは、発展途上国を含めた政治的発展の歴史と理論、さらには国際政治の実態や歴史について学びながら、政治学に関する基本的な概念や理論を理解し、それにもとづいて現実の政治現象を解釈・分析できるようになることを目指しています。

「基礎論」は、「政治学Ⅰ」および「政治学Ⅱ」などからなります。これらの講義では、政治学における基本概念（民主主義、権力、政治体制など）や歴史について説明するとともに、これまで展開されてきた政治学の理論にもとづく政治現象の分析を紹介します。

「各論」は、「国際政治論Ⅰ」、「国際政治論Ⅱ」、「公共政策論Ⅰ」、「歴史の中の政治と人間」、「現代政治分析への招待」などからなっており、基礎論にくらべて、より専門性の高いテーマを扱っていますが、特別な予備知識がなくとも履修できるように配慮がなされています。具体的には、国際政治や行政、政治思想などについて講ずるものや、政治現象を分析するためのさまざまなモデルや手法の紹介がなされるものがあります。

「基礎ゼミナール」では、主としてゼミ形式で、基礎的文献の講読や各自の研究報告などをおこなうこととなっています。特別な予備知識などは必要ありませんが、受講者の積極的な参加が望まれます。なお、基礎ゼミナールは後期に

開講されますが、前期には政治学関係の ILAS セミナーとして「公共政策論 I」「国際政治論」が開講されています。ゼミ形式の授業に興味がある人は、基礎ゼミナールだけでなく、これらの ILAS セミナーの履修も推奨します。

③ 経済学関係科目の分類

経済学関係科目は、基礎的な内容を中心とする基礎科目、より限定されたテーマを取り扱う各論科目、および少数で講読・研究発表などを行なう基礎ゼミナールで構成されています。

基礎科目は、「経済学 I」において、そもそも経済とは何かという視点から、幅広く経済を見る目を鍛えることを目指します。また「経済学 II」においては、現代経済の諸問題をどう考えるかという視点から、諸課題の把握・理解を目指します。それぞれ、経済思想史、マルクス経済学、ミクロ経済学、マクロ経済学という4つの観点から、「経済学 I」において長い射程で経済そのものを論じ、「経済学 II」においてより現代的な諸課題について考えます。「経済学 I・II」はいずれも「基礎論」的性格をもちますが、ここで「基礎」とは、必ずしも初学者のための「初歩」、あるいは経済学部におけるカリキュラムの「初級」を意味しません。予備知識を必ずしも必要としませんが、経済学の基礎となる思考法を理解してもらうことを目標とします。なお歴史・文明分野の基礎科目「現代文明 I・II」も、狭義の歴史学に収まらない分野横断的な視点から経済文明の原理を探るものであり、併せて履修することが望まれます。

各論科目は、「社会経済システム論 I・II」、「現代経済社会論 I・II」、「公共政策論 I・II」などがあり、政治・社会など隣接諸分野との関連（インターフェイス）、現代との関連（フロンティア）をより強く意識した講義を提供します。

基礎ゼミナールは、少数で講読や研究発表を行なうゼミ形式の授業であり、全学部・全学年にわたる学生が一堂に会して議論できる稀有な空間です。受講者には主体的な参加が望まれます。前期の ILAS セミナーを履修した学生が後期に本ゼミナールを続けて履修することで、より学修が深められるよう工夫されており、ILAS セミナーと組み合わせた系統的履修が望まれます。

(7) 日本理解分野

日本理解分野は、留学生を対象としたもので、日本に対する関心を広げ、理解を深めることを目的としています。学部生の留学生に向けては Culture and Traditions in Japan I、Culture and Traditions in Japan II（2クラス開講）、Current Issues in Japan I、Current Issues in Japan II の4科目が提供され、人文科学や社会科学の視点から、日本の文化、社会の特徴について概観できるよう構成されています。また、多様な文化的背景を持つ受講生が想定されることから、日本、自国、他国の文化や社会状況の比較を通して、それぞれについての理解を深めることも目指します。講義は英語で行われ、KUINEP 学生の推奨科目となっています。

留学生を対象とした科目ですが、一部科目では、留学生以外であっても、日本の文化、社会について留学生と共に学ぶ意欲のある本学学生の聴講（単位付与は行われぬ）を認めています。詳しくは各科目のシラバスを確認の上、担当教員に相談してください。日本人学生については KULASIS での登録を認めていませんので、ご注意ください。

Culture and Traditions in Japan I（前期）では、「一期一会」、「以心伝心」などのキーワードを手がかりに、言葉を通して日本文化の特徴を探っていきます。Culture and Traditions in Japan II（後期・湯川 志貴子 担当）では、年中行事、信仰、婚姻、教育などの日本文化の様々な側面を取り上げ、文化や伝統の特徴、その歴史的変遷を考察します。同じく Culture and Traditions in Japan II（後期・阿久澤 弘陽 担当）では、第二次世界大戦、差別、経済・政治問題、ポップカルチャーなどのトピックを通して日本近現代史を概観します。Current Issues in Japan I、II は共に社会科学的視点から、Current Issues in Japan I（前期）は家庭、学校、職場、スポーツ、コミュニケーション、Current Issues in Japan II（後期）は少子・高齢化などの人口問題、女性の社会進出やジェンダー意識、格差社会などの題材を選定し、日本社会の特徴について学びます。以上の4科目は、日本に関する知識が十分でない人でも理解できるよう配慮されています。また、複数の科目を受講することで、より幅広い内容を網羅し、効果的な学習が期待できるようになっています。

※Current Issues in Japan I（前期）については、人文・社会科学科目群教育・心理・社会分野「日本観照：多文化環境で学ぶ現代日本社会の諸相」との合同授業として実施されます。

(8) 外国文献研究分野

全学向けに E1 科目として開講される「外国文献研究（全・英）-E1」は、言語と結びついた文化や芸術、あるいは言語科学に関するテーマを取り上げて、これらの専門領域に関する知識や理解を深めると同時に、当該分野のテキストの読解をとおして、学術に資する英語力を強化することに重点を置きます。

このような本科目の性質上、授業では、担当教員による解説のみならず、受講生が積極的に参加する場も提供され、講義と演習を融合した形態がとられます。受講生が、〈ことば〉に関わる文化や科学の第一線の研究に触れ、実践的に関わることによって、英語という〈ことば〉に対する感覚を磨きつつ、教養を涵養することが、本科目の目的です。

外国文献研究分野では、この他に特定の学部に向けた科目が開講されます。詳細は、p.71～を参照してください。

②自然科学科目群

(1) 数学

全学共通科目として提供されている数学科目は、理系向けと文系向け及び全学向けに分かれています。主要なものについて、その概要を「理系向け」と「文系・全学向け」に分けて説明します。

▶「理系向け」

多くの自然科学・応用科学において、数学はその理論を記述するための言葉を提供します。実際、数学無しにはこれらの理論を理解することも正確に記述することもできません。数学は、いわば学問の礎なのです。そこで、理系の多くの学部・学科においては、全学共通科目における数学科目を「専門の基礎となる科目」として必要に応じて幾つか指定し、クラス指定科目として履修を推奨しています。ここでは主にこれらの科目について概説します。

クラス指定科目として挙げられる数学科目で多くの学部・学科の学生に関係するものは、次の表にまとめられます。

①	微分積分学（講義・演義）A・B 線形代数学（講義・演義）A・B
②	微分積分学統論Ⅰ・Ⅱ、線形代数学統論 確率論基礎、数理統計（※分野はデータ科学）

この表の①・②は学修の順次性を示しており、原則、①に書かれている科目を学修してから②に書かれている科目を履修することになります。また、学部・学科によっては、②で学修した内容は更なる発展的内容の数学を学修するための基礎事項となります。

数学の学修においては、その順次性は無視できません。微分積分の基礎事項の理解も無しに微分方程式（これは微積分統論Ⅱで扱われます）を論じようというのは、喩えるなら四則演算も知らずに代数方程式を論じるようなものであり、殆ど意味を成さないでしょう。したがって、初期段階の数学の学修を疎かにすると後の学修に悪影響が生じるのは至極当然のことです。各学生においてはこのようなことの無いよう、特に1回生担当の科目については、担当されたクラス指定科目を着実に履修することが強く望まれます。

▶「文系向け・全学向け」

文系向け・全学向けに開講されている科目には、例えば以下のものがあります。

数学基礎 A・B [文系]

数学探訪Ⅰ・Ⅱ

左側に挙げられている科目は文系向けの科目で、将来の学修で必要となりうる数学的技法を学ぶことを主たる目的とした科目です。現在では、分野によっては文系といえども高校数学の範囲を超えた数学が必要となります。そのような数学的技法を、高校で数学Ⅲを履修していない学生を対象として講義します。

右側に挙げられている科目は全学向けの科目です。実践的な数学的技法を修得するための科目というよりは、むしろ数学の多様な価値に触れることを目的とした科目であり、数学の色々な分野を題材にした講義が行われます。

▶ 数学科目の紹介 — 関数の解析を切り口として —

関数 数学において「関数」は重要な概念です。関数とは、何かを入力すると数一つ出力される、そういう装置です。出力される数のことを関数の値と言います。入力するものを動かすとそれに応じて関数の値が動きます。関数は変化する量を表わしています。数学では、関数はいろいろな動機を持って研究されています。では、何故関数が興味を持って調べられるようになったのでしょうか？それは世の中の多くの「現象」が関数という言葉によって記述されるからです。

「現象を関数で記述する」とはどういうことでしょうか？例えば、新幹線に乗って京都から博多に向かうとき、時刻 t における列車の位置を京都からの走行距離として $x(t)$ と表せば、新幹線の走行という現象を関数で記述したことになります。新幹線が一定の速度で走行していれば、 $x(t)$ は一次式になり、加速中は下に凸の、減速中は上に凸の関数になります。

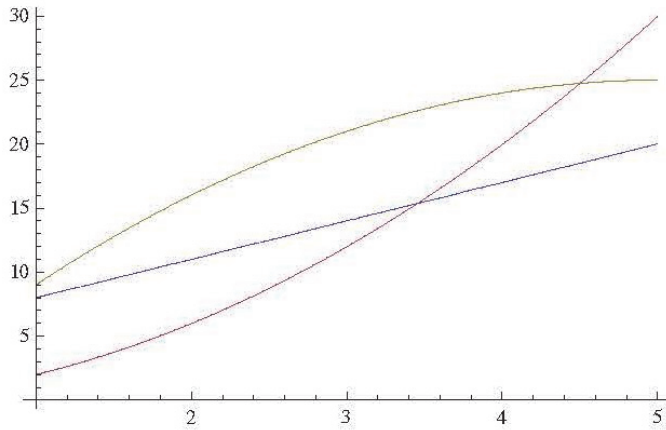


図1 走行距離のグラフ

他にも例を挙げましょう。ある地域の各地点 P に対してそこでの温度 T を対応させれば、これは地点 P の関数を定めます。地点 P は座標をつかうことによって2つの変数 x, y で表されますので、温度は2変数関数 $T(x, y)$ で表わされることになります。

温度ではなく、各地点 P での空気の流れ(風)を考えると、それは風向きと強さで表わされます。したがって、風の状態は各点 P に風向きの方に風の強さに比例した長さの矢印を配置することで表現されます(図2)。 $P=(x, y)$ を根元とする矢印の、矢の先端の x 座標の値から x を引いたものを $u(x, y)$ とし、 y 座標の値から y を引いたものを $v(x, y)$ で表わすことにすれば、風の状態は $(u(x, y), v(x, y))$ という2変数の関数2個の組で表わされます。これもまた関数の仲間であり、2次元ベクトル場と呼ばれます。ベクトル場は「流れ」を記述する際に自然に出てきます。

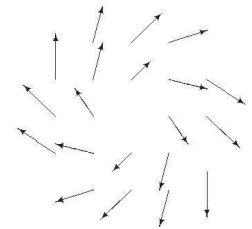


図2 ベクトル場

諸科学において、まず現象を関数で記述し、次にその関数の性質を調べ、最後にそれを現実の現象の下に解釈して理解する、という手続きが、近代以降、基本的・標準的な枠組みとなりました。そして、この枠組みの真ん中の部分、「関数の性質を調べる」という部分を、数学が主に担当しているのです。

微分積分とは 数学では関数を調べるために多くの技法が開発されています。全学共通科目として提供される数学科目はこうした技法の基礎を与えています。なかでも微分積分学は中心的な存在です。

微分とは与えられた関数を一次式で近似することです。関数 $x(t)$ を $t=t_0$ で微分することは、変数 t の値が t_0 に近いとき(局所的)にもとの関数(複雑なもの)を一次式(簡単なもの)で近似することです。

$$x(t) - x(t_0) \sim c(t - t_0)$$

近似するというのを、関数のグラフが表わす曲線を使って言い換えるならば、この一次式のグラフは、曲線上の点 $(t_0, x(t_0))$ における接線に他なりません。接線の傾きが $t=t_0$ における微分係数です。微分係数がわかればその関数の t_0 の近くでの挙動「増加しているのか、減少しているのか」がわかります。微分学は、関数の局所的な振る舞いを調べます。

積分は、関数の大局的な情報を与えます。区間での積分(定積分といいます)は、変数 t が一定の範囲を動く間にその関数が各 t の近くで生み出す寄与を、全て足し上げたものです。例えば、 t_0 から t_1 までの積分の値を $t_1 - t_0$ で割ったものはもとの関数の平均値を与えます。

微分積分とは、微分と積分を合わせたものですが、単に「微分と積分」という意味ではありません。「微分積分学」という言葉は微分と積分が有機的に関係していることを一言で表しています。実際、微分積分学の基本定理と呼ばれる重要な定理があって、それは微分と積分を互いに逆の操作として結びつけるものです。

いま述べたことを、新幹線の走行を例に、具体的現象と結び付けてみましょう。関数 $x(t)$ が時刻 t における列車の位置(走行距離)を表すとき、 t_0 での微分係数 $x'(t_0)$ は時刻 t_0 での速度です。関数 $v(t) = x'(t)$ は各時刻における速度を表わします。今度は関数 $v(t)$ の時刻 $t=t_0$ から $t=t_1$ までの積分を考えてみましょう。 $t=t_0$ から $t=t_1$ までの間の、速度 $v(t)$ の寄与の積み上げとは何を意味するのでしょうか? 各時刻 t において単位時間当たり $v(t)$ だけ移動することが速度の意味ですから、その寄与(t の近くでの走行距離)を足し上げて得られる量とは、時刻 t_0 から t_1 まで間の走行距離 $x(t_1) - x(t_0)$ です。すなわち、速度の積分で走行距離(すなわち基準点からの位置)が得られます。微分積分学の基本定理は微分と積分を互いの逆として結びつけると述べましたが、物体の運動の記述に現れる位置と速

度という関数については、位置を微分したら速度が現れ、速度を積分したら位置が得られるという関係になっています。

線形代数とは 線形代数とは、線形性という言葉でとらえられる構造あるいは性質について考察する分野で、線形空間(ベクトル空間とも言う)と線形写像を扱います。

世の中の様々な現象を観察すると、足し算とスカラー倍(実数倍)が自然に考えられる対象がいろんなところに潜んでいることがわかります。例えば、力には向きと強さがあるので、力はベクトルで表わされますが、物体を3つの方向に引っ張ったときに、力が釣り合ったとすれば、3つの引っ張る力は、ベクトルとしての和が0になります。

ベクトル場に対して、足し算とスカラー倍を考えることができます。図3の上段のベクトル場を左から θ_1 , θ_2 , θ_3 と書くと $\theta_1 + \theta_2 = \theta_3$ である。また、下段はベクトル場 θ_3 を $3/2$ 倍にしたベクトル場がどうなるかを示しています。ベクトルに対して、 $3/2$ のような数のことをスカラーと呼びます。足し算とスカラー倍からなる構造が線形性であり、足し算とスカラー倍が定義された集合が線形空間です。

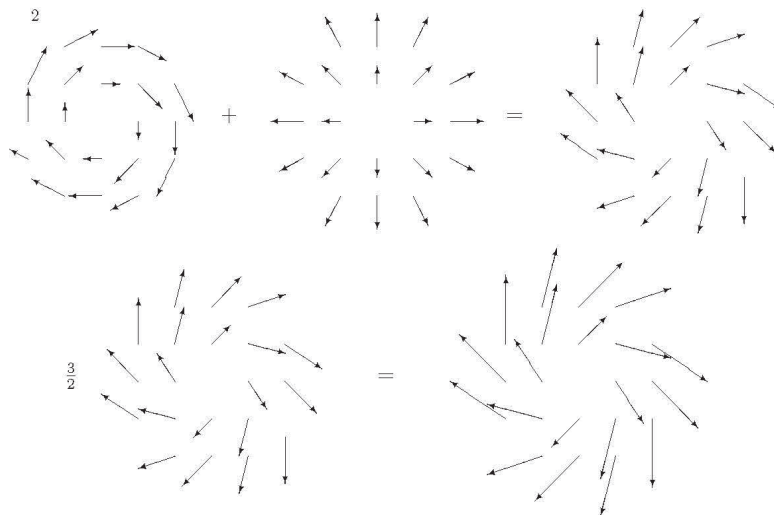


図3 ベクトル場の和とスカラー倍

数に対して数を対応させるものが関数ですが、もっと一般に、例えばベクトルに対してベクトルを対応させるときは関数という代わりに写像という言葉を使います。ここで話題にしたいのは写像の線形性です。写像の線形性とは何でしょうか?例えば、平面に原点 O を決め、 O を中心に角度 θ の回転を考えましょう。回転は平面から平面それ自身への、点を点に移す写像です。平面は原点を決めることによって、2次元ベクトル全体の集合である線形空間 V と同等になるから、回転は V から V への写像を決めます。

2次元ベクトル v に対しそれを回転したベクトルを $R_\theta(v)$ と書きます。この写像はベクトルの足し算とスカラー倍に対して次の性質を持ちます。

$$R_\theta(c_1v_1 + c_2v_2) = c_1R_\theta(v_1) + c_2R_\theta(v_2)$$

足し算とスカラー倍を先に行なってから回転するか、回転してから、足し算とスカラー倍をするか、結果は同じになります。これが写像の線形性です。言い換えると、ベクトル v_1 と v_2 の写像による行き先を知っていれば、第3のベクトル $c_1v_1 + c_2v_2$ の行き先が判ってしまいます。平面上のベクトルは無限個ありますが、それらは、適当な2つのベクトルから足し算とスカラー倍で作ることができます。したがって、写像が線形であれば、2つのベクトルについての情報からすべてのベクトルに対する情報が読み取れます。これが線形性のポイントなのです。

関数を調べる際にも線形性は必要となります。2変数の関数を考えましょう。点 $P_0 = (x_0, y_0)$ の近くで関数 $f(x, y)$ を微分するとは、関数を $P = (x, y)$ が P_0 の近くにあるときに、 P_0 からの微小変化 $\Delta x = x - x_0$, $\Delta y = y - y_0$ の1次式 $c_1\Delta x + c_2\Delta y$ で近似することです。

$$f(x, y) - f(x_0, y_0) \sim c_1\Delta x + c_2\Delta y$$

c_1 と c_2 を与えるだけでこの1次式は決まります。微分することによって、無限個の情報の中から、 P の近くでの関数の変化の様子を統制する、2個の量 c_1, c_2 を取り出すのです。

一定の性質を持つ関数の全体を線形空間として考えることも重要です。関数に対して和とスカラー倍が自然に定義されますが、線形の微分方程式の解の基本性質は解の全体が線形空間になることです。すなわち、2つの解から一次

結合(足し算とスカラー倍で作ったベクトル)によって別の解を作ることができます。後で述べるように線形の微分方程式は自然現象の理解のために欠かせないものです。

量子力学では、物理状態はある線形空間 F のベクトルで表わされます。さらに、ハミルトニアンと呼ばれる線形写像 $H: F \rightarrow F$ があって、ある実数 E に対して $Hv = Ev$ が成り立つようなベクトルのことを、エネルギーが E の状態と考えます。量子力学では、線形代数は、理論そのものを記述する上で本質的な役割を演じるのです。

他科目・他分野との繋がり 全学共通科目には、多くの数学科目が提供されていますが、それらは独立に存在するものではなく、互いに密接に関連しています。微分積分は微分積分学(講義・演義) A, B で、線形代数は線形代数学(講義・演義) A, B で学びます。ここでは、それ以外の主要なものについて、その内容と互いの関係を概説しておきます。

現象は関数で記述されると冒頭で述べましたが、諸科学に現れる現象は「法則」に束縛されて生じます。例えば物理現象は該当する物理法則の下に出現します。現象を関数で記述したとき、物理法則は関数を束縛しますが、多くの場合それは微分方程式という形で現れます。したがって、微分方程式は実際に現象を理解する上で重要な位置を占め、それを解くことは切実な問題です。例えば熱の伝導は、熱が温度の高い場所から温度の低い場所へ、温度勾配に比例して伝わるという原理と、温度の変化は流れ込む熱量に比例するという原理によって決まります。この2つの原理から、温度変化を表わす関数に対する方程式が導かれます。これは熱方程式と呼ばれます。熱方程式は線形微分方程式と言って解の全体が線形空間になるという性質を持ちます。特に、細い針金の両端を温度 T_1 と T_2 に保ち、十分時間がたって温度変化がなくなった状態で、針金の各点における温度 $T(x)$ は、位置 x の関数として線形微分方程式を満たしますが、この場合の解は2つの関数1 と x の一次結合(すなわち解は x の1次式)になります。これにより、 $T(x) = c_1 + c_2 x$ の具体形が2個の未知数 c_1, c_2 に対する2元連立方程式(中学の数学)を解くことによって求まってしまう。微分方程式の初歩については、微分積分学及び線形代数学の知識を前提にして**微分積分学統論Ⅱ**で学びます。

少々脱線にはなりますが、微分方程式という言葉を出した以上、ニュートン力学に触れないわけにはいきません。ニュートンの運動方程式は最も有名な微分方程式です。個別の力学現象に対し運動方程式を立て、それを微分積分の技法を使って解くことにより理解します。この意味で微分積分の技法は古典力学の問題に力を発揮しますが、それは偶然ではありません。そもそも、ニュートンは古典力学を記述し、その問題を解くために微分積分学の着想に至ったのですから。

ベクトル場に対しては、一味違った「微分・積分」が導入されます。その「微分」は「流れ」の局所的な傾向を記述し、「積分」は「流れ」の大局的な影響を記述するのに本質的な役割を演じます。さらに、ベクトル場に対する「微分積分学の基本定理」も確立されており、ガウスの発散定理やストークスの定理という名前と呼ばれます。これらは**微分積分学統論Ⅰ**で学ぶベクトル解析の内容です。この科目も、微分積分学のみならず、線形代数の内容を前提として学ぶこととなります。

ベクトル解析は、電磁気学と相性が良く、電磁気学を記述するには必要不可欠なものです。実は、電磁気学を記述するためにベクトル解析が作られたという背景もあり、結果的に相性が良いのではなくそのように作られていると言ふべきです。電磁気学の理解とベクトル解析は不可分なのです。

以上、各科目の大まかな内容と分野間のつながりについて述べました。全学共通科目として提供される各数学科目はそれぞれが独立した一科目として提供されているのではなく、互いに関係しながら体系として積み上がっていくものだということがわかっていただけたでしょうか。

おわりに 現在の数学は一つの学問として相当に洗練されおり、その体系は、広範な応用を念頭において「抽象的」に記述され、また誰にでも同じ内容が伝わるようにと、論理的な「厳密性」をもって組み立てられています。しかし、そのせいで初学者はしばしば全体像を見失うこともあります。そんなときは、先に指摘したように各数学科目は繋がりをもっていることを思い出してください。抽象性・厳密性ゆえに、学んでいる数学と自身の興味のある科学分野との関連が見えず、「為にする数学」をやっているように感じるときもあるかもしれません。そんなときにも、例えば「微分方程式と力学」や「ベクトル解析と電磁気学」のように、数学が現象の記述を目的に生まれたことを思い出してください。これらの視点が、学ぶことに疲れてしまったときに元気を与えてくれることもあるでしょうから。

数学の理論と技法を身につけるためには、何よりも自分で手を動かして、実例に当たってみるべきです。他の自然科学において実験が重要であるように、数学においては演習が重要です。演習とは自分で考え、計算することでなければなりません。そうして、納得のいかないことが出てきたときは、さらに考え、友だちと議論し、TA(ティーチングアシスタント)に教えてもらったり、先生に質問をしてください。繰り返しになりますが、数学は数学の内部で、また他の自然科学との間で、強力なつながりを持っています。何か解らないときに、そこに立ち止まらずに学習していくと、他とのつながりを見つけることによって、解らなかつたことが解らなくなる場合があります。解らないこと、納得のいかないことがあっても、その疑問を持ち続けて、あきらめずに先に進むことが大切です。

数学は潜在的には皆さんの将来の学問分野の基礎となる力を持っています。それを超えて皆さんによって数学が現実的に諸科学の基礎として活用されることを願います。

(2) データ科学

現象を観察し分析して法則性を導くことにより現象の裏に潜む原理を解き明かす、という過程は学術における基本です。自然科学において実験により取得したデータだけでなく、人文科学・社会科学を含めた広範囲な学術において、フィールド調査により取得したデータ、収集によって得られた資料の分析は学術を進展させるための貴重な資源です。最近では、集積された大量のデータを二次的に活用するデータ駆動型研究も行われています。

日常生活においても、ICT (Information and Communication Technology) の発達によって、データを最大限に生かした新しい価値やサービスが次々と創出されていることは実感されます。例えば、ネットショッピングを行えば、購買データが自動的に蓄積され、客の嗜好を分析して販促方法を決定し、新商品を開発するための基礎資料として活用されることとなります。データの利用は、企業活動だけでなく、法律、金融・保険、健康・医療、災害対策など社会における様々な分野の発展に大きく寄与しています。情報ネットワークとサイバー空間が飛躍的に発展している今日では、データを利用することの重要性は高まる一方です。

データを収集して管理し、必要に応じて流通させ、さらに数理的手法により分析することにより結論を導き、将来の推測を行う学問は近年では「データ科学 (Data Science)」とよばれています。データを扱う学問としては古くから統計学が発達してきました。特に数理統計学は数理的手法を用いることにより展開される学術分野です。さらに ICT の発達によって収集可能なデータが大規模化したため、それを扱う計算を高速に行うための情報学の修得も要請されています。すなわち、データ科学は、統計学、数理科学、情報学が融合した学問とみなすことができます。データ科学を学ぶことは、データを数理科学に裏付けられた理論に基づいてコンピュータを用いて分析し、その結果から適切な判断を下す、という一連の手法を学ぶことです。

全学共通教育においてデータ科学を修めることは、各自の専門分野において学術を修得し進展させるための基礎を身に付けるだけでなく、これからの社会において必要とされる知識の基本をも学ぶことにつながります。実際、わが国では、新産業創出や企業存続、社会サービスの向上、国際化進展などのためにはデータ科学の知識を持った人材が近い将来に不足することが懸念されており、データ科学を修めた人材の確保が喫緊の課題とされています。学術を進展させるだけでなくこのような社会からの要請に応えるということも鑑み、全学共通教育においては、データ科学科目として以下の科目を提供し、統計学・数理科学・情報学を横断的に学ぶことができるようにしています。

なお、文部科学省が定める「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (リテラシーレベル)」において認定を受けたプログラム (<https://ds.k.kyoto-u.ac.jp/literacylevel-2/>) となっている「統計入門」の単位 (2 単位) を修得することで、同プログラム修了証の取得が可能です。さらに、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度 (応用基礎レベル)」において認定を受けたプログラム (<https://ds.k.kyoto-u.ac.jp/ouyo-kiso/>) となっている「統計と人工知能」「データ分析基礎」「データ分析演習 I」「データ分析演習 II」のいずれかの単位 (2 単位) を修得することで、同プログラム修了証の取得が可能です。各科目の概要は下記のとおりです。

1. 統計入門 (英語対応科目 : Introductory Statistics-E2)

データの解析手法についての学問である統計学は様々な分野において重要です。この講義では、データ科学が広範な分野に関わることを鑑み、より多くの学生が統計学の基本的な考え方を理解することを目標にしています。数学的な理論を厳密に理解することよりも、データを扱うエンドユーザーとしてデータの性質に応じた適切な分析方法を選択できるようになることを目指します。そのため、生活の身近な話題についての応用例を数多く紹介し、自然な形で統計的思考法が身に付くようにします。さらに PC 上で統計解析ソフトを用いる演習を自習形式で取り入れ、実際のデータ処理を通じた感覚的な理解も深めます。

2. 統計と人工知能 (旧科目名「統・統計入門」) (英語対応科目 : Second Course in Statistics-E2)

文理問わず全ての分野の学生がエンドユーザーとして理解しておくべきリテラシーレベルの統計学をまとめた「統計入門」の発展版で、「統計入門」で扱い切れなかったより高度な話題 (分散分析、回帰分析、因果推論、深層学習、画像処理など) を扱います。昨今、様々な分野の問題解決に大活躍している人工知能・機械学習の基本的な考え方や手法を理解し、統計学がどのような形でその基礎を形作っているかを学びます。

3. 数理統計 (英語対応科目 : Mathematical Statistics -E2)

統計学は様々な数値データの処理手法を提供しますが、ややもするとその手法の意味を理解することなく機械的な計算に陥ってしまいがちです。手法の意味するところを理解して初めて得られた解析結果を適切に利用することが可能となります。数理統計学は確率モデルに基づいた数理的手法による統計学であり、この講義では推定や検定などのデータ処理手法を裏付ける数学的な論理の構造を理解することにも力点が置かれます。

4. データ分析基礎 (英語対応科目 : Basic Data Analysis-E2)

ビッグデータを分析し知識発見をするスキルは、今や文理や学問分野を問わず求められる時代です。この講義では、

ビッグデータ分析を視野に入れた、統計入門の一步先の分析法（重回帰分析・主成分分析など）や推測アルゴリズムについて学習します。

5. データ分析演習 I、II（英語対応科目：Data Analysis Practice I、II-E2）

データ分析では、分析の手続きを覚えることはもちろんのこと、分析結果を正しく解釈し、そこから何らかの価値を見出すことが重要です。本講義では、統計入門で学習した手法を用いてさまざまなデータを PC 上で分析しながら、データ分析の基礎技術を実践的に体得することを目標としています。利用されるデータ分析手法や統計解析ソフトは学術分野によって異なるため、履修者が今後専門とする分野や興味に合わせてできるだけ幅広い選択ができるように、異なる専門分野を背景に持つ教員、異なる講義内容を揃えています。

6. 数理・データ科学のための数学入門 I、II

データ科学は統計学、数理科学、情報学の融合した学問であるため、エンドユーザーとして手法を学ぶだけでも、最低限の数学的知識が必要です。データ科学を学ぶための基礎としての数学の中から、I では条件付き確率、統計の基礎、多変量のデータ分析の基礎、データ解析の線形代数の基礎について、II では微分積分の内容を総合的に講述します。数学的な理論の完全な体系ではなく、データ科学への応用を重視し、各自の PC 上での演習を含む内容とします。文系学部学生が高校数学Ⅲの知識を持たないことに配慮します。

(3) 物理学

物理学は我々の日常生活から宇宙科学やエレクトロニクスに至るまで現代の高度に発達した科学・技術文明を背後で支えている重要な基盤の一つです。特に、ニュートン力学やマックスウェルの電磁気学といった古典物理学から、相対論や量子論といった現代物理学に至るまで、実験・観測と理論的考察が相俟って歴史的に発展を遂げ、体系化がなされているのが大きな特徴です。学習の目標としては物理学での諸概念の把握と法則を的確に記述する数学的手法、そして物理学の見方や考え方を修得することが挙げられます。物理学はこのように自然科学の基礎の一つであり、理系の学生の皆さんにとっては将来いずれの分野に進むにせよ何らかの形で関わりを持たざるを得ない科目と言えるでしょう。

▶ 「理系向け」

理系の学生向けの全学共通科目はこの物理学の体系に従って科目構成がなされています。それらは学習の進度により順次性を保って次のように3つの段階からなります。

第1段階	物理学基礎論 A+物理学基礎論 B 物理学実験	初修物理学 A、B (物理学初修者向け)
第2段階	熱力学 振動・波動論 力学統論 電磁気学統論	
第3段階	解析力学 統計物理学 量子物理学 現代物理学実験	

- ◇ 第1段階の「物理学基礎論 A」(力学)、「物理学基礎論 B」(電磁気学)、および「物理学実験」は物理学の基本を学ぶ科目であり、理系のすべての学生にとって必要な基礎的知識なので、1回生にクラス指定されています。
- ◇ 「初修物理学 A、B」は、高校で物理を選択しなかった学生を対象としたもので、履修は本学入学試験で物理を選択しなかった学生に制限されていることに注意して下さい。
- ◇ 第2段階の科目は第1段階の科目を履修した上で次のステップで学ぶ、1・2回生を対象としたいわば統論的な科目です。
- ◇ 第3段階は第1および第2段階の科目を履修した上で学ぶ2回生用の科目です。分野ごとの階層性・順次性を示すと以下ようになります。

分 野	第1段階	第2段階	第3段階
力 学	物理学基礎論 A	力学統論	解析力学
電 磁 気	物理学基礎論 B	電磁気学統論	
熱・統計力学		熱力学	統計物理学
振動・波動		振動・波動論	
現代物理学			量子物理学
実 験	物理学実験		現代物理学実験

▶ 「文系向け」

文系向けとしては、予想を出し合って実験で結果を確かめていく「みんなの物理Ⅰ・Ⅱ」があります。

みんなの物理Ⅰ	みんなの物理Ⅱ
---------	---------

※ 注意

これら以外にも、物理学関係の全学共通科目(理系向けあるいは全学向け)が提供されています。それらについては、KULASISでそれぞれの授業内容を参照して下さい。

(4) 化学

全学共通科目として提供されている化学系科目の構成について示します。

① 理系向け

主に1回生を対象とした大学化学の初修者向けの講義・実験科目として、

- ・基礎物理化学要論
- ・基礎物理化学（熱力学）、基礎物理化学（量子論）
- ・基礎有機化学Ⅰ、基礎有機化学Ⅱ
- ・基礎化学実験

が開講されています。

物理化学は、物理学の理論と方法を基礎にして物質の構造・性質・反応を研究する学問です。物理化学の中で熱力学、量子論をそれぞれ主な内容として深く詳しく学ぶ科目が基礎物理化学（熱力学）、基礎物理化学（量子論）です。基礎物理化学要論は、熱力学と量子論の両方についてそれらの要点を半年間で学べるようになっています。基礎有機化学Ⅰ・基礎有機化学Ⅱは、これらを学ぶことによって有機化合物の化学の基礎知識を修得するものです。また、講義で学修した理論や反応を、実際の実験によって確認することができるよう基礎物理化学・基礎有機化学の双方に関連する実験科目として基礎化学実験を開講しています。これらの科目を学ぶことによって、大学化学の基礎を修得します。

なお、これらの科目のうち、どれを履修するかは学部・学科によって適切な科目がクラス指定あるいは推奨されています。「Ⅴ. 各学部の修得すべき全学共通科目の単位数」(p.175～)を参考にしてください。

<注意>

以下の場合には全て科目名変更をした同一科目の扱いとなっているため、修得年度、修得期の早いもの1つしか卒業に必要な単位として数えられません。

- 薬学物理化学（熱力学）修得後の、基礎物理化学（熱力学）
- 基礎物理化学（熱力学）または薬学物理化学（熱力学）修得後の、基礎物理化学要論
- 基礎物理化学（量子論）修得後の、基礎物理化学要論
- 基礎物理化学要論修得後の、基礎物理化学（熱力学）または基礎物理化学（量子論）
- 基礎有機化学A修得後の、基礎有機化学Ⅰ
- 基礎有機化学B修得後の、基礎有機化学Ⅱ

※ 基礎物理化学A・基礎物理化学Bと基礎物理化学（熱力学）・基礎物理化学（量子論）の同一科目関係については、KULASISにて案内しますので、必ず確認してください。

上記の科目に加えて、主として1・2回生向けに、化学のフロンティアⅠ・Ⅱが開講されています。

さらに詳しく化学の各領域を学ぶための発展科目として、次のものが提供されています。

<主として1・2回生向け>

生命の有機化学、理論化学入門Ⅰ・Ⅱ、有機化学演習A・B

<主として2回生向け>

無機化学入門A・B、探究型化学課題演習Ⅲ－有機化合物の化学－、探究型化学課題演習Ⅰ－海の化学－（令和6年度不開講）、探究型化学課題演習Ⅱ－湖の化学－（令和6年度不開講）

② 文系向け

主に文系学部の1回生を対象とした科目として、次のものがあります。

化学概論Ⅰ・Ⅱ、文系向の基礎化学Ⅰ・Ⅱ、自然と環境の化学、生活と環境の化学

③ 英語による講義・実験科目

英語による講義・実験科目として、E2科目が開講されています。「Ⅲ. 全学共通科目授業科目」の「2. 全学共通科目一覧」(p.102～)に日本語科目との対応が示されています。学部により、日本語科目と対応するE2科目を履修した場合の単位の取り扱いが指定されていますので、各学部の履修要覧等を確認してください。

(5) 生物学

生物学の内容は非常に多岐に亘ります。そして近年の生物学の展開は他の分野にも及び、その境界は不明瞭になりました。京都大学では多くの部局が生物を対象とした研究・教育に取り組んでおり、多数の教員がすぐれた研究成果を得ています。学部から独立した附置研究所まで含めると相当な数になるでしょう。実は生物とは何か？という問いに答えるのは容易ではありません。全学共通科目では、多数の生物学・生命科学関係科目を開講することによって、皆さんの学習意欲を活性化するようにしています。また、これと同時に授業を以下のように体系化して、履修をしやすくしています。

この項では、全学共通科目全体の中から生物学・生命科学関係科目を抽出し、その内容に応じて、「総論」と「各論」の分類、さらにその下位分類を説明します。

「総論」とは、基礎レベルの生物学を学習する授業と実習です。多くの履修者が履修の機会を得られるように、同じ科目名で授業・実習が複数開講されます。生物学を必要とする学部に進学したものの、高等学校で生物学を履修しなかった人には、とくに勧めます。異なる曜日と時間帯に、同じ内容の授業や実習を複数開講しているので、各自の時間割の都合に合わせて履修できるはずです。

「各論」は、植物学や動物学の自然史や各生物の生態、分子生物学や脳神経科学のような特定の分野の基礎から最先端領域までを学習する授業です。こちらの授業でも、高等学校における生物学の履修経験は必ずしも必要としません。文系の学部にも所属する学生が履修しやすい科目も設定されています。

「総論」と「各論」の分類については本冊子の「Ⅱ. 全学共通科目授業科目」の「4. 全学共通科目授業一覧」(p.121～)に記載の分野の見出しに掲載していますので参考にしてください。

本項が皆さんの科目選択の一助となり、より良い学習が行えることを望みます。

「総論」

① 生物学の基礎（講義）

文字通り、生物学の基礎を学ぶ講義科目です。「生物・生命科学入門」という科目名で、前期に5コースを開講します。高校での生物の履修は必要ありませんが、単なる高校の補習ではなく、グローバルな視点を取り入れた大学らしい学習内容ですので、基礎から生物学を学びたい方には、まずこの科目の履修を勧めます。

② 個体・集団レベルの生物学（講義）

地球には1千万種とも推定される生物がいます。さまざまな生物の特徴や生存戦略、進化様式などを、主に個体・集団レベルで学ぶ講義科目です。「個体と集団の基礎生物学」という科目名で、後期に5コースを開講します。

③ 分子・細胞レベルの生物学（講義）

ヒトを含む動物、植物、細菌、古細菌、ウイルスなど、さまざまな生物が生存する仕組みを、細胞、分子、遺伝子レベルで学ぶ講義科目です。「細胞と分子の基礎生物学」という科目名で、前期に1コース、後期に5コースを開講します。

④ 最先端の生物学（講義）

総論の授業では、広く認められて教科書に記載されている内容を学習することが中心になりますが、「生物学のフロンティア」はその真逆の、今まさに取り組まれている生物学分野を紹介する授業です。生物学研究で世界をリードする京都大学の教員が、自ら切り開いた生物学をそれぞれ授業します。

⑤ 生物学実習（実習）

生物学の勉強を座学で終えることは望ましくありません。授業で知り得た内容を現地観察や実験を通して自分の眼で観て、手を動かしてデータをとり、深く考えることが大切です。吉田山、鴨川、宝ヶ池公園、北山といった自然に恵まれた地域に近い京都大学は、生物学実習には理想的な環境にあります。以下の生物学実習は内容によって3つのカテゴリーに分類されます。

生物学実習Ⅰ：生物学全体を俯瞰するために、細胞と分子、動物や植物・菌類の個体や集団を扱った実習です。いわゆるマイクロ系とマクロ系の両方を学習する実習です。前期に4コース、後期に2コースを開講します。

生物学実習Ⅱ：動物や植物・菌類の個体や集団だけを扱う自然史の実習です。前期に1コース、後期に1コースを開講します。

生物学実習Ⅲ：細胞や分子レベルでの実習を行います。前期に1コース、後期に1コースを開講します。

この他にも、夏期や冬期に集中して行う実習が複数ありますが、演習の要素も付加してILASセミナーにしています。

「各論」

① 自然史学関連（講義）

野生生物の多様性や環境との関わり、進化などについて学習します。生態学、植物学、動物学ごとに授業が編成されており、「動物自然史Ⅰ」、「植物自然史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の科目が開講されます。また、これらと同じ趣旨の授業として、「自然人類学Ⅰ・Ⅱ」、「霊長類学入門Ⅰ・Ⅱ」、「行動生態学入門」、「藻類学概論」、「野生動物学入門」、「博物誌学」、「「生命の進化」概論」などの科目が開講されます。基本的にⅠとⅢは前期に開講し、Ⅱは後期に開講しますが、授業担当教員の都合により変更があります。シラバスで確認して下さい。

② 分子生物学関連（講義）

生物学を細胞、分子、原子レベルで解明する学問領域を学習する授業です。科学的解明が近年もっとも進んだ分野です。「生物物理学入門」、「生化学入門」、「遺伝学概論」、「分子遺伝学」、「先端生命科学を支える技術Ⅰ・Ⅱ」などの科目を前後期に開講します。

③ 脳神経科学関連（講義）

記憶、学習、情報伝達などに深く関わる、脳と神経の構造と作用メカニズムについて学ぶ講義科目です。「神経科学の基礎」、「神経生理学の基礎—生体情報論—」などの科目を開講します。脳と神経機能がどのように作動し、維持されているか、その仕組みについて学びます。

④ 他分野に越境する生物学（講義）

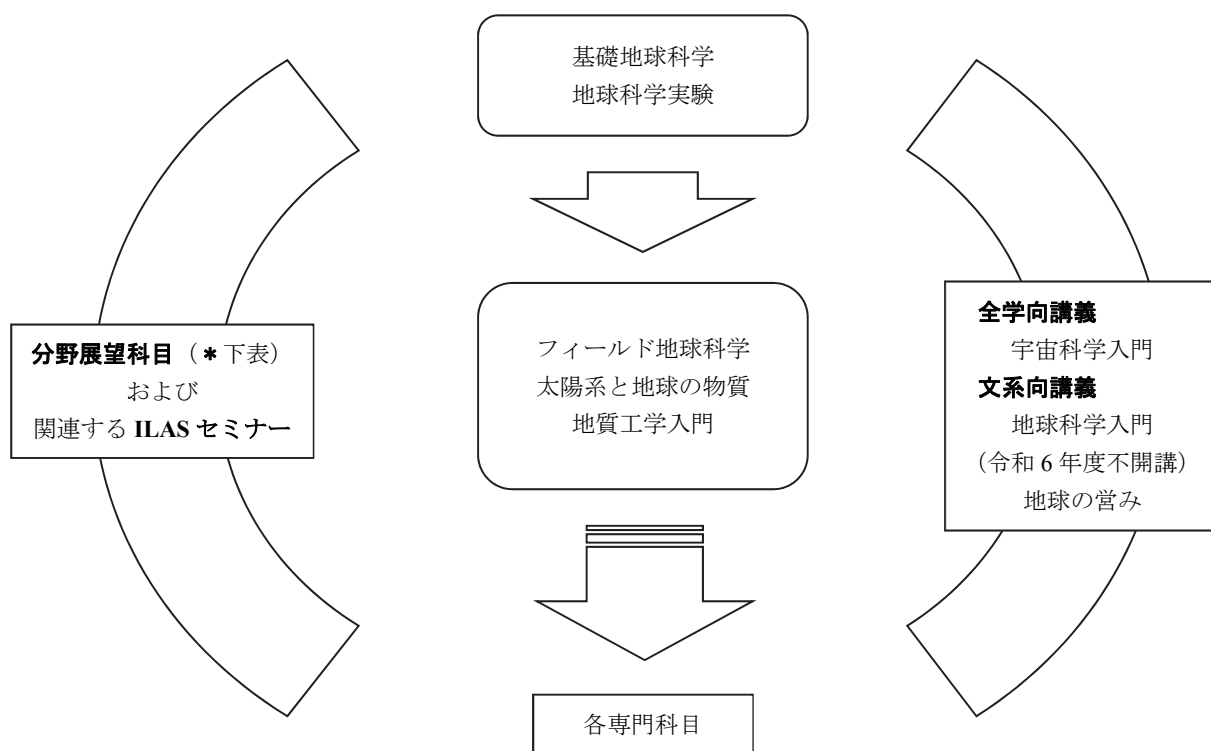
生物学の境界を越えて展開する学問分野を学びます。「化学と生物の分子集合学」、「生命と情報」などの科目を開講します。

この他にも以上の範疇に当てはまらない授業科目や数多くの英語講義が用意されています。ネイティブスピーカーによる英語講義である E2 科目は、30 科目以上を提供します。シラバスをよく読んで、皆さんの学習デザインに役立てて下さい。

(6) 地球科学

地球科学（惑星科学も含む）は非常に幅広い対象を扱う分野です。その学習には、ただ一つのルートがあるわけではありません。異なる学問を背景にした者が、それぞれの強みを活かして研究を推進する、そういう分野だからです。地球科学を学習し、その知識を実社会で応用する、あるいは地球科学の専門に進むためには、地球科学が対象とする範囲の全体像を見ておく必要があります。

そこで、地球科学の広い範囲を概観し、その基礎的な知識と手法を学ぶための講義、実験として「基礎地球科学」、「地球科学実験」があり、各専門科目につながる橋渡しとして「フィールド地球科学」、「太陽系と地球の物質」、「地質工学入門」が用意されています。また、惑星としての地球を俯瞰する目的で、宇宙科学のトピックスを専門家が講述する「宇宙科学入門」も並行して開講されています。ただし、これらの講義でも地球惑星科学関係のすべての分野を網羅することは困難なので、学内の関連部局（理学研究科、工学研究科、人間・環境学研究科、エネルギー科学研究科、防災研究所、生存圏研究所等）の教員による各専門分野を展望する講義・セミナーが、自然科学科目群だけに留まらず、統合科学科目群や少人数教育科目群（ILASセミナー）にも多数開講されています。また、E科目としての英語講義も用意されています。各自の興味に応じて、これらの講義を選択してください。また、地球惑星科学はそれだけで閉じた学問分野ではありませんので、数学、物理、化学、生物などの基本的知識も必要になることが多くあります。地球科学だけでなく、これらの他分野の講義も積極的に履修することを薦めます。



* 分野展望科目

自然科学科目群： 地球の物理 地球の誕生と進化 水と緑と土の科学 天体観測実習 など

統合科学科目群： 統合科学：自然災害の科学 環境学 生存圏の科学概論 など

(7) 図学

■図学とは

図学 (Descriptive Geometry, 図法幾何学) は、3次元と2次元との間の図形の変換理論です。わかりやすくいえば、3次元の立体を2次元の平面情報に変換する、また反対に、2次元の平面情報をもとに3次元の立体を構成するための理論です。

構造物、機械類、地図、その他をつくるにあたっての技術として、あるいは美術の世界における表現としてなど、図学はさまざまな領域における基礎的理論となっています。たとえば、平面図や立面図、断面図から建築物を建てる、航空写真から地図を作製する、目に見える通りに絵を描くといったことは、すべて図学の範疇です。

コンピュータが発達した現在においても、図学が空間把握・立体表現の基礎理論・技術であることに変わりありません。また、諸領域への広がり考えた時、図学の知識は、技術や美術における実践のみならず、文化・文明の理解へとつながっていると言えるでしょう。

■図学の目的

3次元の立体図形を2次元の平面図形に変換する理論と技術の習得と、2次元の平面図形において3次元の立体図形を操作する理論と技術の理解が、図学の大きな目的です。3D→2Dを行き来しながら、立体を把握・表現するリテラシーの獲得を目指します。

また、図学は、ルネサンス期に透視図法が探求されたことを端緒として、その後、研究が進展しますが、それは芸術や軍事、数学といった諸領域と結びついたものでした。こうした文化史的、社会的、科学的展開を理解することも図学の目的に含まれます。

■履修にあつての基礎知識/理系と文系の違い

中学卒業程度の幾何学の知識があれば、履修に支障はありません。そのため理系、文系を問わず履修可能です。

■図学科目の構成

図学 A と図学 B の2科目から構成されます。図学 A (基礎) →図学 B (展開) の順で履修してください。図学 A のみでも基礎的作図法は学べますが、図学の楽しさを知るには、図学 B まで履修することを推奨します。

図学 A 基本的作図法の修得

3次元を2次元で表現する方法 (投象) のうち、軸測投象、正投象を扱います。



図学 B 立体の諸状態についての作図

立体の諸様態 (切断・陰影・相貫) および、透視図法の作図を行います。

③外国語科目群

(1) 英語

◆平成 28 年度以降学部入学対象

科目名	符 号	開講期	単位	対象回生	定員	備 考
英語リーディング	ER	前期	2	1 のみ	約 40	1 回生専用クラス・アカデミックリーディング
		後期	2	1 のみ	約 40	
	ESR	前期	2	2 以上	約 60	単位未修得者クラス
		後期	2	1 以上	約 60	
英語ライティングーリスニング A	EWLA	前期	2	1 のみ	約 20	1 回生専用クラス・アカデミックライティング&リスニング
		後期	2	1 のみ	約 25	1 回生専用上級クラス・アカデミックライティング&リスニング
	ESWLA	前期	2	2 以上	約 50	単位未修得者クラス
		後期	2	1 以上	約 50	
英語ライティングーリスニング B	EWLB	後期	2	1 のみ	約 20	1 回生専用クラス・アカデミックライティング&リスニング
		前期	2	1 のみ	約 25	1 回生専用上級クラス・アカデミックライティング&リスニング
	ESWLB	前期	2	2 以上	約 50	単位未修得者クラス
		後期	2	2 以上	約 50	

1 回生対象の英語科目は平成 28 年度に改編されました。英語科目には大別して、リーディングクラスとライティングーリスニングクラスの二つがあり、それぞれを履修しなければなりません。

リーディングクラスは、学部の履修方針に応じた洋書や、まとまった長さのある学術的な文献などを対象としたアカデミックリーディングを通して、英語による学術的教養の涵養を目指しています。アカデミックリーディングは、英文の意味を捉える読解力の強化を目指すとともに、その文章が書かれた文化的、社会的背景や思想などにまで踏み込むものです。教員からの一方的な教授ではなく、対話による能動的な学習を行うことで、英米のみならず、様々な国の文化や社会、思想の理解を通じて、真に国際人として通用する教養と知識の涵養に努めます。

ライティングーリスニングクラスは、1 クラスあたり約 20 名の少人数クラスによる、きめ細かな指導の下、英語技能の習得に努めます。ライティングに関しては、学術的な文章の作成に必須となる論理的な英文の基本構造を学び、エッセイライティングやレポート作成などのアカデミックライティングを通して、学術的言語技能を養うことを目標としています。また、リスニングに関しては、オンライン課題に取り組むことで、英語による講義の聴講を念頭に置いた聴解力を育成します。さらに、外国人教員と日本人教員のチームティーチングを導入し、前期もしくは後期のいずれかを外国人教員が担当することで、英語コミュニケーション能力の育成を目指します。

いずれのクラスも、大学の英語科目としてふさわしい内容とレベルを考慮しています。

◆工学部地球工学科国際コース・Kyoto iUP 生対象

Scientific English I A (Reading and Writing)

Scientific English I B (Technical Communication & Discussions)

(2) 初修外国語

卒業に必要な初修外国語の単位規定や予備登録規定などについては、「全学共通科目履修の手引き」(本冊子)を参照して下さい。また成績評価の詳しい基準は各科目ごとに授業中に指示します。

ドイツ語 – German –

ドイツ語は、ドイツはもちろん、オーストリアやスイスをはじめとした 6 カ国以上で公用語とされている、ヨーロッパを代表する言語の一つです。広い地域で母語として話される生きた言語であると同時に、多くの非母語話者によって習得が目指される主要な言語でもあります。学問をするためにも必須の言語で、哲学をはじめとした人文学や、社会科学分野には多くのドイツ語古典がある他、現在でも重要な研究文献がしばしばドイツ語で書かれています。このように、ドイツ

語で書かれた文献を読むことができれば、研究に多いに活用できるのはもちろん、さらにはドイツ語圏の歴史や文化、思考法を深く理解することもできます（そしてドイツ語圏の文化は、いわゆるドイツ人だけでなく、例えばユダヤ系のルーツを持つ人々によって紡がれてきたものであります）。

とはいえ、ドイツ語は大部分の学生にとって、初めて学ぶ外国語であろうと思います。そのため初級ドイツ語の授業は、ドイツ語の文字を正しく発音することに始まります。1 回生向けの初級ドイツ語は「文法」と「演習」からなり、それぞれが相互に補いながら、内容的にも構文的にもあまり複雑でない文章を読み書きする能力、またドイツ語を用いて簡単な会話ができる程度の力を養います。2 回生以上向けの「中級ドイツ語」では、初級ドイツ語の知識を前提に、内容的にも幾分深みのあるドイツ語文を読み書きし、多少複雑な構文を正確に理解する能力を身につけることを目標にしています。中級のテキストは文学作品や哲学・思想的著作をはじめ、時事問題に関する評論など、できるだけ多様なものを提供し、学生の関心に応えられるようにしています。

また、ドイツ語の会話力をさらに高め、種々のテーマに関してドイツ語で専門的な発表が行えるように、会話・ライティングおよび CALL 授業も開講されています。さらに、もっと集中的にドイツ語を学びたい人のために「6H コース」（週 3 回の授業）や、高度なドイツ語能力を身につけたい人たちのために「上級ドイツ語」も設けられています。詳しくはシラバスの説明を読んで選んでください。

◆全回生対象（初級） ※再履修者クラスを含みます

- ドイツ語 I A・B（文法）
- ドイツ語 I A・B（演習）
- ドイツ語 I（6H コース）

◆学部 2 回生以上対象（中・上級）

- ドイツ語 II A・B
- ドイツ語 II A・B（会話）
- ドイツ語 II A・B（CALL）
- ドイツ語 II A・B（ライティング）
- ドイツ語 II（6H コース）
- ドイツ語 III A・B

フランス語 – French –

フランス語は、西欧の知的世界の共通語として用いられてきた輝かしい文化的伝統を持ち、現在も英語に次ぐ国際語です。また学問・教養のための外国語としては世界各国で最も広く学ばれていて、ヨーロッパでは知識人でフランス語のできない人はほとんどいません。したがって、国連やユネスコなどの国際機関・国際会議で常に公用語の一つになっています。また、フランス語は、スイス・ベルギー・カナダのほか、アフリカ諸国のほぼ半数、中近東・東南アジアなどの多くの国々でも、公用語あるいは最もよく通じる外国語です。

このように国際舞台上で重要なフランス語ですが、その学習のために、学生の皆さんのニーズの多様化に応える、さまざまなコースが用意されています。1 回生向けには標準コースの①「クラス別コース」とインテンシブ・コースの②「8H コース」、2 回生向けでは、標準コースの③「中級」とインテンシブ・コースの④「6H コース」があります。さらに、中級まで終えた人のために、より高度な⑤「上級」も用意されています。すべてのコースで、「読む」「書く」「話す」「聞く」の 4 つの能力を総合的に開発するように配慮され、インテンシブ・コース②④はもとより、標準コース①においても、すべてのクラスにネイティブ・スピーカーの授業が設けられています。

それぞれの到達目標は、以下のとおりです。

◎標準コース①と③の組み合わせでは、週 2 回の授業を 2 年間で、

「読む」能力：辞書を引きながらフランス語の文章をある程度のスピードで読むことができます。

「書く」能力：簡単なフランス語の手紙文程度の文章を書くことができます。

「話す」と「聞く」能力：日常会話の受け答えがある程度できます。

◎インテンシブ・コースの②と④の組み合わせでは、1 回生週 4 回、2 回生週 3 回の授業で、

「読む」能力：辞書を引きながらフランス語の文章をかなりのスピードで読むことができます。

「書く」能力：フランス語の手紙文程度の文章をかなり書くことができます。

「話す」と「聞く」能力：日常会話の受け答えが非常にスムーズにできます。

◎⑤「上級」では、上記を超えるフランス語運用能力が獲得でき、フランス文化全般についての理解もある程度深まります。

以上のようなフランス語運用能力の養成は、学問の場にいる者にふさわしい学術的言語技能の涵養に資することを最終

目標にして行われます。

◆全回生対象（初級） ※再履修者クラスを含みます

フランス語 I A・B（文法）
フランス語 I A・B（演習）
フランス語 I（8H コース）

◆学部2回生以上対象（中・上級）

フランス語 II A・B
フランス語 II A・B（演習）
フランス語 II（6H コース）
フランス語 III A・B

中国語 - Chinese -

我々が学ぶ「中国語」は、多民族国家である中国において圧倒的多数を占める漢民族の言語、すなわち「漢語」をさします。漢語は、文字記録によって確認されるだけでも三千三百年もの歴史を持ち、現在は十億人以上の人々に使用されている大言語です。漢語には多様で豊富な方言が存在するのですが、我々が大学で学ぶ「中国語」は、特定の地域の漢語方言ではなく、「普通話」と呼ばれる、北京方言を基礎として規範化された共通語です。これは、近代以降に、方言差異に起因する教育の困難さを克服することを目的の一つとして制定されたものであり、現在では多くの中国人が、自身の方言あるいは民族語と、「普通話」とを併用しています。皆さんが、大学で「普通話」を習得すれば、何億もの人々と直接的にコミュニケーションし得る道具を手に入れることになるのです。

漢字を使い、多くの「音読み」の漢字語を持つ日本人にとって、中国語は入門しやすい外国語の一つです。これは奈良時代以前から、日本人が漢籍を通じて中国語を受容し、日本語の中に「音読み」という中国語からの借用語を不断に取り入れてきた結果に他なりません。その一方、「政府」「経済」「革命」「文化」「理論」「分析」といった現代日本語で近代的概念を表す「音読み」の漢字語は、その少なからぬものが、明治維新期前後の日本において、伝統的な「音読み」の漢字語に近代的な意味が付与されて創られたものであり、上述の単語のようにしばしば現代中国語に「逆輸入」されています。大学で「中国語」を学ぶことは、以上のような複雑で重層的な日本語と中国語との歴史的な関係を窺い知ることにも繋がるのです。

本学においては、発音と基本的表現の習得を目的とする初級として、「中国語 I A・B（文法）、I A・B（演習）」が、また読解力、表現力などさまざまな面からのより進んだ学習を目的とする中級として、「中国語 II A・B」が開講されています。

◆全回生対象（初級） ※再履修者クラスを含みます

中国語 I A・B（文法）
中国語 I A・B（演習）

◆学部2回生以上対象（中級）

中国語 II A・B

ロシア語 - Russian -

Здравствуйте! Давайте изучать русский язык вместе в Киотском университете! 「こんにちは！京都大学で一緒にロシア語を勉強しましょう！」。ロシア語はキリル文字を用います。この文字が読めるようになったら、書けるようになったらカッコよくないですか？ロシア語の文法規則は複雑ですが、その分新鮮な気持ちで学べるはずです。

日本の隣国であるロシアは単に面積が大きいだけではありません。文学、音楽、宇宙開発、天然資源、演劇、バレエ、スポーツ…ロシアは「〇〇大国」とよく呼ばれるにふさわしく、世界に誇る分野を数多く持っています。また、国際社会でも常に独特の存在感を放っています。ロシア語はヨーロッパからアジアにまたがる広大な地域を中心に、5億人に達する人々によって話されています。ロシア語を勉強することは、ロシアの文化や社会を知るだけでなく、多様な旧ソ連の国々やロシア国内の諸民族の言語や文化、ウクライナやブルガリアなど、ロシア語と同じスラヴ系の東欧諸国の言語や文化を知る足がかりにもなります。

このロシア語を初めて学ぶ学生の皆さんに最適なコースとして、ロシア語 I（文法）およびロシア語 I（演習）のセット授業が用意されています。一週間に文法と演習を各1コマずつ、合計2コマを履修します。初級履修者にとって必要にして十分なロシア語の力が、無理なく着実に養えるコースです。ロシア語初級の授業は回生・学部・クラスに関係なく、

誰でも受講できます。辞書を引きながら新聞や雑誌の簡単な記事を読めることが、初級の到達目標です。中級では、知的鍛錬・教養の向上を念頭に置きつつ、読解力を高め、専門領域での最低限の情報収集能力を身につけさせることが目標です。同時に、「読む・書く・聴く・話す」のバランスのとれたロシア語の力を目指して行きます。さらに、上級では、初級と中級で学んだ文法事項をさらに強化し、様々なジャンルのロシア語のテキストの読解力を高めることを目標とします。

◆全回生対象（初級）

- ロシア語ⅠA・B（文法）
- ロシア語ⅠA・B（演習）

◆学部2回生以上対象（中・上級）

- ロシア語ⅡA・B
- ロシア語ⅢA・B

イタリア語 — Italian —

「すべての道はローマに通ず」（*Tutte le strade conducono a Roma*）と、かつて言われましたが、永遠の都ローマをはじめ、ファッションで世界をリードするミラノや、ルネサンスの花の都フィレンツェ、マルコ・ポーロを生んだ水の都ヴェネツィアなど、輝かしい都市文化の伝統をもつイタリアは、今日もお全世界の人々を魅了してやまない国のひとつです。

そのような古代ローマ以来の長い文化的背景を有するイタリア語は、ラテン語を母胎とするロマンス諸語のひとつであり、地中海沿岸地域やラテン・アメリカ諸国で使用されているポルトガル語、スペイン語、カタロニア語、フランス語、ルーマニア語などとは姉妹言語に当たります。

イタリア語Ⅰは、発音から始まり、イタリア語の基本知識の習得を旨とする入門コースです。文法を集中的に学習するクラス（4Hコース）と、最初から簡単な会話を並行して学ぶクラス（文法と演習のセット）の2種がありますが、ある程度本腰を入れてイタリア語をやってみようという人には、時間割の許す限り前者のクラスをお奨めします。13世紀以来ほとんどその姿を変えていないイタリア語の場合、会話を上達させるうえでもオーソドックスな文法の知識がきわめて重要だからです。

また、後者のクラスを選んだ場合には、2回生以上を対象としたイタリア語Ⅱの履修に制限が生じますので、全学共通科目履修の手引きの「外国語の履修について」の該当頁をよく読んでください。

◆全回生対象（初級）

- イタリア語ⅠA・B（文法）
- イタリア語ⅠA・B（演習）
- イタリア語ⅠA・B（4Hコース）

◆学部2回生以上対象（中級）

- イタリア語ⅡA・B
- イタリア語ⅡA・B（演習）

スペイン語 — Spanish —

みなさんの多くは、大学ではじめて母語と異なる言語、つまり「異言語」とまともに向き合うことになると思います。大学より前の教育課程では英語のみを学んできた人が大部分だと思いますが、多くの場合、その学習は受験という目的に向かって突き進む、単線的なものであったはずですが、言語学習一般から見ると、その学習経験は、非常に特異で限定されたものです。これからは、その経験にとらわれることなく、さまざまな試行錯誤を繰り返すことを厭わずに学習をすすめるという態度が不可欠になります。なぜなら、大学での言語の授業とは一里塚のようなものであり、一里塚をたどっていけば一定の目標が達成されるように配慮されていますが、一里塚と一里塚の間は自分の足で歩くことを求められるからです。一里塚と一里塚の間に道は無数にあり、正しい道が決まっているわけではありません。一里塚と一里塚の間で迷ったり、どんどん先の一里塚を提示されて、ついていくことを断念してしまう人もいます。迷ったり遅れたりした時に、一緒に歩いている仲間にあずねたり、地図とコンパスを見て確認したり、教員に助力を仰ぐという行動をとることができる必要があります。だまっけても誰も手を引いてはくれません。主体的に道を探し、それを自らの足で歩いてみることを要求されます。

受験英語の学習と大学での言語学習との根本的な違いは、その目的設定にあります。受験のための英語学習は合格のためという目的が明確であり、そのため重要なポイントも所与のもので（試験にでるところが重要）。ところが、大学での

言語学習は、あらかじめ与えられた目的があるわけではなく、目的の設定から学習者が行わなければなりません。そのため、重要なポイントも決まっていません。なにが重要かということは、目的によって変化するからです。とりわけ言語のような、あらゆる局面で用いることができる一種の万能道具という側面を持つのであれば、なおさらです。もちろん、スペイン語習得一般において重要な点はほぼ決まっており、学習開始当初はみなさんにとってもそれが重要となります。しかし、学習が進むにつれて、一般的に重要なポイントと「あなた」にとって重要なポイントの間にズレが生じることは十分にあり得ることです。

ちなみに、大学での1単位というのは、45時間の学修によって構成される内容と定められています。授業だけでは想定されている学修時間には足りず、不足分は授業外で行う必要があるということです。もちろんこれは標準的かつ最低限の想定であり、学習者個人が自らの状況を判断して学修時間を増減させることが必要です。

あたらしい言語を学び、それを通じて得られる新しい経験は、非常に魅力的なものです。上に述べたことは、スペイン語独特の魅力をよりよく味わうために必要なことなのです。厳しく響くかもしれませんが、それだけの見返りはあると思います。

なお、平成28年度より、中級履修のための条件が「スペイン語ⅠB（文法）の単位を修得していること」と変更になりました。全学共通科目履修の手引きの「外国語の履修について」の該当頁をよく読んでください。また、会話コースは特殊な形態ですので、欠席の扱いが他コースとは異なります。シラバスを熟読してください。

◆全回生対象（初級） ※再履修者クラスを含みます

- スペイン語ⅠA・B（文法）
- スペイン語ⅠA・B（演習）
- スペイン語ⅠA・B（会話）

◆学部2回生以上対象（中級）

- スペイン語ⅡA・B
- スペイン語ⅡA・B（演習）

朝鮮語 — Korean —

「はじめて話すのに、なつかしい」

日本語を母語とする人にとって、朝鮮語との出会いは、こんな感じではないか、と思います。今まで全く縁遠い言葉だったのに、はじめてこの言葉に接した途端、なぜか昔から知っていた音のようになつかしく、私たちの心の中で響くのです。

朝鮮語は、主に朝鮮半島に住む人びとによって使われている言葉です。日本でこの言語を呼ぶ名称は一定しておらず、韓国語といたりコリア語といたりもします。本学では朝鮮語と呼んでいますが、韓国語やコリア語といっても内容は全く同じものです。そのほか「ハングル」という名称もありますが、この「ハングル」というのは朝鮮語を表記する「文字」の名前ですので、本来は言語の名称として「ハングル」という言葉を使うのは間違いです。

朝鮮半島には現在、「大韓民国（韓国）」と「朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）」という二つの国がありますが、この二国はもともと同じ民族の一つの国でしたので、そこで使われている言葉も同じものです。ただ、分断されてすでに70年近くの年月が経っていますので、若干の違いが生じていますが、それでも韓国の人と北朝鮮の人が出会ってもほとんどの言葉は通じます。

朝鮮半島に住む8千万人近くの人びとがこの言語を使用しています（そのほか海外に暮らすコリアンも数百万の単位で存在します）。数としてはほかの初修外国語より少ないといえますが、何といても日本語を母語とする者にとっては、特別に親密な関係にある言語ということができます。単に日本のお隣の国の言葉だ、というだけでなく、日本語ときわめてよく似た言語である、というのが朝鮮語の最大の特徴といえるでしょう。

まず驚くことは、文のしくみがそっくりなのです。「私は今日バツハを聴きたいです」という日本語を朝鮮語にするには、「私」「は」「今日」「バツハ」「を」「聴き」「たい」「です」という文の要素をひとつひとつ朝鮮語にして、日本語と全く同じ順番でそのまま並べればよいだけなのです。むずかしい文法用語を知らなくても、あっという間に立派な朝鮮語をつくることができます。

そのほか、漢字語を多用し、その熟語が日本語と同じものが非常に多いのも、日本語母語話者にとって非常に学習しやすいポイントです。ハングルという幾何学模様のような文字で表記されていますので、最初はとっつきにくいのですが、実はもともとは漢字からできている語彙が、朝鮮語にはきわめて多いのです。

近年、ようやく隣国の言葉や文化を学習する日本人が増えてきました。歴史的に日本と最も近く、密接な関係にあった朝鮮半島の言葉や文化を知ることは、日本の言葉や文化をより深く知ることに通じるでしょう。そして21世紀の複雑化する世界情勢理解への足がかりを、隣国を知ることから始めるのも意義あることです。

まず初修者は、「ハングル」という文字を読めるようになる必要があります。ハングルは15世紀に人工的につくられた新しい文字で、そのため非常に合理的なしくみでできています。10の母音字母と14の子音字母を基本として、これを組み合わせて一音節を一文字で表記します。数週間でこの文字に慣れた後の文法の学習は、日本語母語話者には非常に理解しやすいと思います。1年間の学習で、新聞・雑誌などの記事を辞書を引ながら読むことができるレベルに到達することが目標です。その後はより高度な文法を身につけ、読解力を高めてゆきます。朝鮮半島と日本の関係、世界の中での朝鮮半島の位置づけなどの点に留意しながら、多様な文献を読み、朝鮮半島の人びととコミュニケーションする能力を養います。

◆全回生対象（初級）

朝鮮語ⅠA・B（文法）

朝鮮語ⅠA・B（演習）

◆学部2回生以上対象（中級）

朝鮮語ⅡA・B

朝鮮語ⅡA・B（演習）

アラビア語 — Arabic —

アラビア語は、広くアラブ世界の国語であると同時に、国連の公用語の一つでもあります。一口に「アラブ世界」といっても、東はインド洋に面したアラビア半島のオマーンから西は大西洋に臨む北アフリカのマロッコ、西サハラまで、国の数は20以上。気候風土も歴史も、政治、文化も実にさまざまであり、宗教的にもムスリム（イスラーム教徒）のみならずキリスト教徒、ユダヤ教徒をはじめ多様な信仰が存在します。しかし、そうした多様性を貫いてあるのが、「アラビア語」という言語文化を共有する者としての、「アラブ人」というアイデンティティです。「アラブ人」とは、アラビア語という言語を自らの母語とする、あるいは、歴史的にアラビア語で培われた文化に自らの文化的アイデンティティを見出す者たちのことです。

言語学的にはセム系言語のひとつであるアラビア語は、長母音を除いて母音は表記されません。つまり短母音の場合は子音のみで綴られるということです。そして、3つの子音の組み合わせからなる3語根の動詞基本形を中心に、第10形まで派生形が展開し、その他の品詞もこの動詞基本形（3語根）から派生しています。これが、同じセム系言語であるヘブライ語とも共通するアラビア語の最大の特色のひとつです。

また、アラビア語の社会言語学的特徴として、アラブ世界の共通語であり読み書きのことばである正則アラビア語（フスハー）とそれぞれの地域における話しことば（アーンミーヤ）のダイグロシア（二言語併用）が挙げられます。私たちが授業で学習するのは、読み書きのことばであるフスハーです。

近代を支配してきた西洋中心主義的な価値観が再検討に付されている今日、イスラーム世界の人々とその文化を私たちが理解することの重要性はもはや論を俟ちません。そのイスラームを理解するうえでも、また、「イスラーム」が生きられている世界を理解するうえでも、イスラームの聖典アル＝クルアーン（コーラン）の言葉であるアラビア語の基本的知識は欠かせません。

前期は「文法」の授業で、教科書に即しながらフスハーの文法を体系的に学習し、後期には、児童用の物語を講読しつつ、前期に習った文法事項を確認し、その修得を図ります。また、「演習」の授業では、ネイティブの先生と連携しながら、前期は練習問題を中心に基礎文法を身につけ、後期は、リスニング、スピーキング、ライティングなど、アラビア語の総合的な力を養います。

しかし、異言語を学ぶとは、単に文法と語彙を覚えることだけを意味するわけではありません。授業では、その言語が「生きられている」世界について、その言語を話す人々がその地でいかなる生を紡いでいるのかについても学ぶことになるでしょう。

これまで慣れ親しんできたラテン文字とは異なる文字体系であり、言語系統もヨーロッパ系諸言語と異なるなどアラビア語のハードルは決して低くはないですが、その分、挑戦し甲斐のある言語だとも言えます。ぜひ、蛮勇をふるって、挑んでください。

◆全回生対象（初級）

アラビア語ⅠA・B（文法）

正則アラビア語基礎文法の習得（前期）、テキストの講読（後期）

アラビア語ⅠA・B（演習）

文法、練習問題（前期）、リスニング・スピーキング・ライティング（後期）

◆学部2回生以上対象（中級）

アラビア語ⅡA・B

日本語 — Japanese —

全学共通科目・日本語科目は、留学生のみなさんに大学での学習活動を円滑に行うために必要な日本語能力を習得する機会提供を目的として開講しています。日本語科目は初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級の5レベルから構成されており、履修レベルは学期開始前に実施するプレースメントテストにより決定されます。

日本語科目は二タイプからできています。一つ目は4技能を総合的に学ぶ総合学習タイプで、もう一つは特定技能強化タイプです。

前者は、短期間で集中的に日本語を学びたい学生向けで、週2コマ構成の4Hコース及び週4コマ構成の8Hコースの二種を開講しています。いずれも初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱの4レベルで開講しています。8Hコースは1学期間で日本語能力試験(JLPT)の1レベルの習得を目指す学生向けのコースです。一方、4Hコースは2学期かけて日本語能力試験の1レベルの習得を目指す学生向けの通年型コースです(各レベルの後期開講の4HコースBでは、教科書の後半のみ扱います)。なお、これらのコースの部分履修は認められていませんので、全クラスに出席することが求められます。

2タイプ目の特定技能強化科目は、会話、聴解、読解、作文、漢字といった特定の技能の上達を目指すもの及び学術的な目的達成のためのアカデミック・スキル習得を目指すものからできています。これらは、専門の学習・研究活動を行いながら、その遂行に必要な日本語力を習得したい学生向けです。とりわけ上級レベルでは大学での学習活動、研究活動に必要な高度なアカデミック・ジャパニーズスキルの習得を目指します。

全学共通科目・日本語科目の単位が卒業単位として認定されるかどうかは身分や在籍部局、専攻によって異なります。履修制限のある科目もあります。

また、適正クラスサイズの確保のために人数制限を設けていますので、履修登録スケジュールを事前に確認し、それに沿って登録を行ってください。

日本語科目の履修は、様々な背景を有する世界各国からの留学生と共に学び、高め合いながら、主体的学習活動に取り組むことを通して、日本語能力のみならず、コミュニケーション力やアカデミック・スキルを向上させる機会です。

◆工学部地球工学科国際コース生優先クラス(初級)

日本語初級ⅠA・B (4Hコース)

日本語初級ⅡA・B (4Hコース)

◆全回生対象(中級)

日本語中級ⅠA・B (4Hコース)

日本語中級Ⅰ (8Hコース)

日本語中級Ⅰ (会話)

日本語中級Ⅰ (聴解)

日本語中級Ⅰ (読解)

日本語中級Ⅰ (作文)

日本語中級Ⅰ (漢字)

日本語中級ⅡA・B (4Hコース)

日本語中級Ⅱ (8Hコース)

日本語中級Ⅱ (会話)

日本語中級Ⅱ (聴解)

日本語中級Ⅱ (読解)

日本語中級Ⅱ (作文)

◆大学院生対象(中級・上級)

日本語中級ⅠA・B (総合)

日本語中級ⅡA・B (総合)

日本語上級A・B (総合)

◆全回生対象(上級)

日本語上級 (聴解)

日本語上級 (会話)

日本語上級 (読解)

日本語上級 (作文)

日本語上級 (論文・レポート作成)

日本語上級 (講義聴解)

日本語上級 (研究発表)

日本語上級 (討論技術)

◆Kyoto iUP 生専用科目

日本語初級Ⅱ (6Hコース) (令和6年度不開講)

日本語中級Ⅰ (6Hコース)

日本語中級Ⅱ (6Hコース)

日本語上級 (レポート作成基礎A・B)

日本語上級 (文献講読ⅠA・B)

日本語上級 (文献講読ⅡA・B)

日本語上級 (文献講読ⅢA・B)

④情報学科目群

全学共通科目の情報学科目は、科目選択の目安となるよう「基礎」と「各論」に分類されています。基礎に分類される科目としては以下の3科目を設定しています。

情報基礎（クラス指定科目ならびに全学向）

この科目は情報科学・情報技術についての教養科目です。大学卒業後、社会に貢献していく上での素養となるような、情報科学や情報通信技術の基礎をなす理論・概念（例えば、情報とは何か計算とは何かに関する理論や、情報の表現方法に関する諸概念）や、現時点で社会に大きな影響を与えている新技術（例えば暗号や人工知能）に関する知識を学びます。

情報基礎演習（クラス指定科目ならびに全学向）

この科目は本学のすべての学生に求められる一定の情報利活用能力を身に着けるための科目です。すべての学生にとって、学士課程における学修や社会的活動、並びに卒業後に大学院や社会における知的活動に際して必要となる情報探索、情報分析、および情報の表現・視覚化などの情報利活用の能力（これらを情報リテラシーと呼ぶ）と、その前提となる情報機器の操作能力（これらをコンピュータリテラシーと呼ぶ）を修得することを目的としています。また、現代社会において情報の収集や発信を行う際を守るべき社会的ルールに関する知識についても併せて修得します。

情報と社会

この科目は情報と社会の関わりについて学ぶ教養科目です。現代社会における情報と情報技術の利用に関連する諸問題に関する知識を獲得し、また、それらについて自ら考える機会を持ちます。

基礎に分類されるこれらの3科目については英語で講義を行う科目も提供されています。

また、情報基礎、情報基礎演習については、学部、学科などを単位にクラス指定して実施されるものと、全学向として実施されるものがあります。クラス指定されている学部・学科に所属する学生の皆さんは、卒業に必要な単位の要件などを確認して、適切な科目を履修するようにしてください。なお、情報を専門として学ぶ工学部情報学科の学生向けには情報基礎演習に代えて「情報基礎実践」が開講されています。

各論に分類される科目では先の「基礎」科目に関連した内容について特定的话题を取り上げてより深く学ぶ科目や、様々な分野で実際に利用されるプログラミングやコンピュータ・グラフィックスなどを演習・実習形式で学ぶ科目を提供しています。一部の各論科目では英語で講義を行う科目も提供されています。

⑤健康・スポーツ科目群

■健康・スポーツ科学分野科目の教育目標

健康・スポーツ教育においては、教養教育の3つの柱（①学術的教養、②文化的言語力、③基盤的・社会的知力）に基づいて、人間の生命・健康・発達、運動と健康の諸問題に関する最先端の学問研究の成果を生かし、「講義・演習科目」及び「実習科目」を通じて次のような総合的な教育目標を目指した教養教育を行います。

- 1) 運動実践を通じた生命・健康・発達の尊重と保障：スポーツ運動・表現運動・生活運動等の身体活動の認識と実践をもとに、生命尊重の精神を培い、健康を維持・増進し、心身の調和的発達を促します。
- 2) 身体活動の文化的価値と科学的原理の理解：各種のスポーツ・身体活動の文化的価値についての理解を深め、健康・スポーツに関する科学的知見に裏付けられた運動活動の実践力を養成し、生涯にわたるスポーツの生活化を図ります。
- 3) 自己信頼性と社会的自立性の啓培：青年期・成人期にある学生の自己信頼性を高め、社会生活を自ら設計し実践していく基礎的な力量を養成します。

〔講義・演習科目〕

教育目的：

身体と精神に関する学術的知識を学び、心身ともに健康で豊かな生涯を送ることのできる基礎的教養を身につけます。特に、身体・運動・スポーツに関する諸学問の成果を学び、健康に関する社会的な諸問題をとらえ、健康と運動の科学的原理について学習します。それによって健康と運動の価値と重要性を理解し、自分自身のよりよい健康づくりの内容と方法を習得し、生活実践の中にその知識を活かして自己形成の健康的な基盤を整えます。

教育目標：

- ①青年期・成人期にある自己の心身の諸機能の特質（機能構造面）とその発達の仕組み（形成過程面）を理解します。
- ②諸機能の合理的・教育的な形成方法を学び、自らの健康を保持・増進していくための基本的な方法論を修得します。
- ③自分自身の自己信頼性を高め、将来にわたって個人・生活場面（家庭）や所属集団（職場や地域社会）で健康的な生活を自主的に設計し実践していくための基礎的な力量を養成します。

〔実習科目〕

教育目的：

講義・演習（理論）において学んだ知識を、スポーツ実習（実践）を通して具体的に実践することによって、自己の身体活動の特質と可能性を理解します。また、各種のスポーツ活動の実践を通じて、人間の根源的な存立基盤としての身体の高機能性を充実させ、運動文化の継承と発展を図り、自己信頼性及び社会的自立性を高めます。

さらに、健康・運動活動に関する基礎的な知識を、実際に現在及び将来の社会生活に応用して健康的な生活を営むための基礎的な技能を身につけ、自分自身及び集団・社会の健康を保持増進させていく資質と力量を養成します。

教育目標：

①（機能形成）：身体活動の基盤となる基礎体力と運動技能の向上を図ります。

各種のスポーツの実践実習を通じて、基礎的な体力・運動技能を形成するとともに、それらのスポーツ活動を取り入れて健康的な生活を設計し実践する力量を養成します。

②（生活実践）：生涯にわたる健康的な生活づくりの基礎的な力量を養成します。

生涯にわたって楽しめるスポーツ種目と出会い、健康づくり・体力づくりの実施方法、スポーツの基礎的な技術と技能、またスポーツ活動を楽しむためのプログラムづくりのしかたを身につけます。

③（社会的交流）：社会的交流活動の実践を通じて自己及び相互の信頼性と社会的自立性を啓培します。

学友と協力し合い、互いの見方・考え方を尊重しながら共通の価値ある目標に向かって努力する基本的な社会的交流能力を養成します。それによって社会実践の力量を形成し、自他を信頼し尊重し期待しあう力量を高めます。

■健康・スポーツ科学分野科目の教育内容

〔講義・演習科目〕

領域構成：

領域①（総論）健康学・運動学原論：心身の生理的諸機能とその発達の特質、運動行動の制御・形成の脳科学的・生理学的・心理学的なしくみ、社会的な健康問題。

領域②（各論）健康と運動についての科学：健康・医療・生活に関する各学問分野からのアプローチ。スポーツ運動・表現運動についての哲学、歴史学、社会・文化論、生理学・心理学・バイオメカニクス等の関連諸科学。

領域③（実践方法論）健康的な生活を設計し実践していくための基礎的な内容と方法。

開講科目：

〔講義〕

基礎：運動科学Ⅰ、運動科学Ⅱ、健康科学Ⅰ、健康科学Ⅱ、健康心理学Ⅰ、健康心理学Ⅱ、脳と生命のシステム科学、Physiology in Health and Sports-E2、Introduction to Lifestyle Related Diseases-E2、Nutrition and Health-E2、Biology and Sociology of Chronic Diseases-E2、Structures and Mechanisms of Human Movement-E2、Introduction to Basic Concepts of Health Psychology-E2、Health Psychology I-E2

発展：精神病理学Ⅰ、精神病理学Ⅱ、生活習慣と生体機能障害、体力医科学、運動のしくみ（令和6年度不開講）、運動の生理学、発達論A（令和6年度不開講）、発達論B（令和6年度不開講）、精神保健福祉概論、スポーツ心理学、医学概論、生体リズムと健康、発達障害論（令和6年度不開講）、リハビリテーション概論、「葉の世界」入門、健康・生命科学入門、学生支援からみた大学生活論、人類と放射線、医工学入門（令和6年度不開講）、放射線概論、身体運動の適応と学習、ピアサポート入門、Introduction to Medical Psychology-E2、Cultural Aspects of Health Care-E2、Psychopathology I-E2

(*備考)「健康科学Ⅰ」「健康科学Ⅱ」「運動科学Ⅰ」「運動科学Ⅱ」「健康心理学Ⅰ」「健康心理学Ⅱ」「体力医科学」は教職科目として認定されます。

〔演習〕

スポーツ指導法ゼミナールA（令和6年度不開講）、スポーツ指導法ゼミナールB（令和6年度不開講）、心の発達と問題行動の理解、脳と心の生命機能ゼミナールⅠ、脳と心の生命機能ゼミナールⅡ、脳・生命・心の探究、脳と身体運動ゼミナール

〔実習科目〕

領域構成：

●スポーツ実習Ⅰ：基礎的・応用的な実践力

1) 基礎技能の修得：環境世界に働きかける運動実践を通じて自らを「知る」：

①自己の健康・体力の現状を把握し、健康づくり・体力づくりの活動を実践する。

②自己の運動技能の現状（特質と到達点）、これからの課題と目標をとらえ、運動活動を企画立案する。

2) 応用技能の修得：仲間に働きかける実践の中で自分自身とチームメイトの力量を「高める」：

①運動・生活技能…各スポーツ種目での対人的・集団的技術、健康を阻害する諸要因への対応スキルを修得する。

②自己教育力・相互援助 … 自己やチームメイトを支え導き、よりよいスポーツ活動を実践する力量を身につける。

●スポーツ実習Ⅱ：発展的・創造的な実践力

- 1) 生活実践計画を「構想する」：自分自身の生涯の健康づくりに適したスポーツ種目を見つけ、それらの運動を取り入れた生活実践計画を立案し実践する。
- 2) 自己教育計画を「創造する」：チームメイトとともにスポーツ活動を楽しむことを通じて、自らの世界をよりよく豊かに充実させていくための新たな自己教育計画を立案し実践する。

開講種目：

- 1) 野外種目：ソフトボール、サッカー、硬式テニス
 - 2) 屋内種目：フットサル、卓球、バドミントン、バレーボール、バスケットボール
 - 3) 野外/屋内：アダプテッド・スポーツ、フィットネス、フィットネス・ウォーキング、フィットネス・サイクリング
- *集中開講：アダプテッド・スポーツ（障害学生優先）

⑥キャリア形成科目群

この科目群では将来のキャリアに関連した科目を、国際コミュニケーション、学芸員課程、多文化理解、地域連携、その他キャリア形成という分類で提供しています。このうち、

- 国際コミュニケーションに分類される科目の大部分は2回生以上を対象にE科目の中のE3科目として指定されています。

E3科目では学術的言語技能の向上を目的とします。教養を深め、異文化を理解し、専門分野の知識を高め、そしてそれらを活用していくためには、学術的言語技能の習得が不可欠です。学術的言語技能は、受容技能と産出技能に大別することができます。例えば、英語による講義を理解するためには聴解力（受容技能）が、聴いた内容に対して自分の意見を口頭で述べるためには発話力（産出技能）が必要です。E3科目ではこうした受容技能と産出技能を統合して学習します。以下ではE3科目の技能領域と目標、概要を例示します。

① アカデミックディスカッション (Academic Discussion) …リスニング&スピーキング

[目標] 英語での講義やニュースなどの音声を聴き、その情報を整理し、口頭で発表する高度な学術的言語技能を養います。

[内容] 対面授業を通して、ゼミ、講義、学会などでの口頭発表や質疑応答などで求められる発話力を主に育成します。さらに、講義を聴き、その内容の要約や自らの意見や主張を述べる能力を育成します。導入、情報提供、結論、議論などの一連の発表技能（presentation skills）のみならず、発表者に対する説明の要求、質問、反論を行うための参加技能（participation skills）の育成も対象とします。

※本科目は、令和5年度以前の開講科目「セミナーパーティシペーション」を再編したものです。

② クリティカルリスニング (Critical Listening) …リスニング&スピーキング (リスニングの自律学習中心)

[目標] 英語での講義やニュースなどの音声を聴き、その情報を整理する聴解力の育成に比重を置きます。また、口頭で発表する高度な学術的言語技能を養います。

[内容] eラーニング教材を活用した自律学習を通じて、ゼミ、講義、学会などのアカデミックな場面で求められる聴解力を主に育成します。また、あわせて口頭発表や質疑応答などで求められる発話力を育成します。

③ アカデミックプレゼンテーション (Academic Presentation) …リーディング&スピーキング

[目標] 学術的な文献などを対象とした批評的、批判的な読解を通して、自らの意見や主張を口頭で発表する高度な学術的言語技能を養います。

[内容] 執筆者の意見や主張を理解し、その根拠となるデータや資料を分析する批判的読解（クリティカルリーディング）能力を育成します。さらに、それらに対する自らの意見や主張をまとめ、効果的に発表する技能の育成を目指します。上級クラスでは、国際学術会議における口頭発表など、より発展的な技能の養成に焦点を当てます。

※本科目は、令和5年度以前の開講科目「オーラルプレゼンテーション」を再編したものです。

④ テストテイキング (Test Taking) …総合的四技能

[目標] 国内外の大学院への進学、学術研究を目的とした海外留学、および留学中に受ける定期試験などで要求されるテストテイキングを中心とした高度な学術的言語技能を養います。

[内容] 単に受験対策（test-taking strategies）の学習にとどまることなく、各試験問題で要求される読解力や聴解力など四技能を総合的に養います。海外の大学における定期試験、および留学に必要な TOEFL® (Test of English as a Foreign Language) などを受験する際に要求される技能の育成が含まれ、テストテイキング

技能の育成には、語彙学習など他の技能の要素も加味されます。

⑤ アクティブリスニング (Active Listening) …リスニング&スピーキング (リスニング中心)

[目標] 英語による講義を履修するために必要となるリスニング能力の育成を目的とします。より具体的には以下の通りです。(1) 英語の音声的特徴を分析的に理解すること、(2) 文脈や背景知識や発話の状況を活用して、次にくる情報や内容などを予測したり自身の理解を修正したりすること、(3) 英語の概論的講義 (10~20 分程度) を聞いて、その概要や要点を的確に把握すること。

[内容] リスニング能力の育成では、語・文レベルでの聴解力を重視するボトムアップ型と、背景知識や文脈などを活用した意味理解を重視するトップダウン型の両方を組み合わせます。

※本科目は、学部1回生でも後期から受講することができます。

国際コミュニケーション分野では、上述の科目以外にも技能向上を目的とした科目が全学向けに開講されます。シラバスを確認して各自が習得を期待する技能を目的とした科目を見つけてください。

- 学芸員課程分野の科目は、学芸員資格を取得する上で履修が求められる科目のうち、全学共通科目として開講されているものです。学芸員資格の取得に関しては p.267 を参照ください。
- 多文化理解分野の科目は、海外での実地研修等において多様な文化的背景を持つ学生と共に学ぶ経験を通して、相手文化への理解を深めるとともに、自分自身が身につけてきた文化を客観的に捉え、それらを他者にわかりやすく伝えるためのコミュニケーション能力の基礎や、文化、社会、習慣に関する多角的アプローチを習得する科目です。令和5年度まで少人数教育科目群において開講されていた「ILAS セミナー (海外)」は、令和6年度以降は本分野の科目「海外実地セミナー」として開講し、海外での実地研修を通じて、現地の自然、政治、経済、文化、歴史などの事情を学び、多文化・地球環境等への理解を深めることを目標とします。
- 地域連携分野の科目は、京都地域の課題について、地方自治体、地元企業、各種団体等との連携を通じて学び、大学がもつ知を活用してその解決法を考え、実践するための力を養う科目です。

⑦統合科学科目群

大学に入学するまでは、現在のところ最も確からしいとされる答えを効率よく記憶することに終始しましたが、大学を終えれば、実社会において未だ答えが知られていない、あるいは答えがあるのかどうかさえ分からない課題に取り組み、置かれた状況の中で最善の答えを模索することになります。さらには、置かれた困難な状況を克服するために解決すべき課題を具体的に設定することも求められます。そのため、大学においては、所属するそれぞれの学部、学科が対象とする領域に固有な専門的知識の習得と論理的思考方法の獲得を目指すのはもちろんですが、領域の壁を越えて対象を多元的な視点から考察する能力を培う必要があります。現代社会が抱える問題の多くは、自然や人間の営みの物質的側面に起因する構成員間の利害対立から生じています。理系の立場からは、人間をとりまく自然の成り立ちを理解し、その理解に基づく技術によって物質的豊かさを追求するのに対し、文系の立場からは、まさにその豊かさがもたらす利害関係の構造を明らかにし、利害を調整あるいは解消する仕組みを模索します。特に、環境や生命をはじめ、現代社会が直面する重要な課題に取り組むには、文系、理系それぞれの領域に閉塞した思考様式の殻を破り、それぞれに欠けている視座の相互補完が望まれます。

本学大学院には文理にまたがる学際領域を対象とするいくつかの研究科があり、広い基礎知識の上に専門的研究を展開していますが、文系、理系のいずれかに特化した領域を対象とする場合でも、異分野の批判的視点からそれぞれの研究を見詰め直す能力を養っておくことが必要です。そのような能力の涵養を目指すのが統合科学科目群であり、統合科学分野、環境分野、森里海連環学分野など、異なる視点から授業を提供します。中でも「統合科学」は、(1) 現代社会が直面し、今後その解決策を探求する必要がある諸課題を対象とした対話を基本とする発見的授業、(2) 思い込みや決めつけ、あるいは置かれた社会や時代の空気に囚われない、客観的データに基づいた合理的思考法を獲得する授業、(3) 様々な学問分野を横断する課題に取り組み、自らが専攻しようとする学問分野の専門的知識・能力を高めるだけでなく、他の学問分野の専門家とも対話することで全体的な解決を模索する授業を目指しています。具体的には、人類社会の持続的発展と深く関わる「生命と社会 (生命科学の進歩と人の生活)」、「生命と社会 (自然と人の関わり)」、「生命と社会 (持続的・健康社会に向けた技術と倫理の協働)」、「持続可能な地球社会をめざして (エネルギー・環境・社会の視点から)」、「閉じた地球で生きる (エネルギー消費と環境)」(令和6年度不開講)、「閉じた地球で生きる (地球環境とエネルギー)」、「自然災害の科学」、「地球環境と人類とのバランス」、「エネルギーを取り巻く環境」の9つの主題のいずれか1つを選択し、文系、理系双方の教員を交えた対話型授業を通して、共時的にも通時的にも多元的な視点からの対象の考察法を習得します。また、統合科学分野では「Interdisciplinary Sciences-E2」も開講されており、外国人教員や留学生とともに英語で学ぶ対話型授業を行っています。

⑧少人数教育科目群

少人数教育科目群には ILAS セミナーとして開講されている科目が含まれます。また、外国人教員が担当する ILAS Seminar-E2 は少人数での対話を中心としたゼミ形式の「英語で学ぶ」科目で、1 回生前期から誰でも受講することができます。これらの ILAS セミナーは、大学での勉学生活への導入を図り、自律的課題発見・解決という学問のプロセスを体験し、学問の楽しさや意義を実感する場を提供します。この「京都大学への入門」である ILAS セミナーには、次の 5 つの履修するメリットがあります。

① 学びの違いを体験

ILAS セミナーは、5 人～25 人程度の学生を対象に、各学部、研究科、研究所、センター等の教員が差向かいの親密な人間関係の中で行う授業です。問題を見つけ解決するという学問のプロセスを、教育の場で体験するために少人数で行わない、講義による知識の伝達ではなく、学生が自ら学問することを学びます。

② 学びの場における仲間との相互作用

ILAS セミナーの授業のテーマは様々です。シラバスからキーワードを検索してみても、「歴史」「地理」「社会」「音楽」「数学」「宇宙」「生命」「医学」「技術」「環境」「資源」等々、京大が丸ごとそこに現われています。そこから始まって、異なる学部、場合によっては異なる回生の仲間ができて、教員と学生、学生どうしの相互作用が実現します。

③ 学びの技法の養成

ILAS セミナーにおける学生どうしの討論、教員の問いかけに答え、スライド・レポートを作成し発表する訓練は、講義を聴き教科書を読むことからだけでは得られない、自分で実際に考え、読み、議論し、書くという力を身につけるきっかけを与えます。主体的な学習の意義を理解し、またアカデミック・スキルの基礎を獲得することをめざしています。

④ 常識や初歩からの跳躍

ILAS セミナーでは、基礎から順次学ぶという手順を踏むのではなく、少人数で研究者と直接接するという特徴を生かして、学生の興味に応じた専門への道標が示されます。あるいは、初歩からの跳躍を経験することにより、学生が自分の進むべき方向を見つける機会ともなります。

⑤ 挑戦の機会

専門に進む前の段階で、ゼミナール形式の授業で学生どうしの議論が真に機能するか、特に 1 回生にとっては簡単なことではないでしょう。しかし、その難しさを挑戦ととらえ、そこに踏み込んでいくことは京大生となったあなたの特権です。また、幅広い視野をもつきっかけとして、各自の専門分野と直接関係のない科目や個人的興味・趣味嗜好にかかわる科目を積極的に選択することもきっと有益でしょう。さあ ILAS セミナーに挑戦しましょう。

(参考)

- 国際高等教育院ウェブサイト紹介ページ
<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/freshman-guide/ilas-seminars>
- 「京都大学での学び」の始まり 全学共通科目と ILAS セミナー（新入生向けパンフレット）
https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/download/freshman-guide/ilas_seminar_pamphlet.pdf

⑨大学院共通科目群

大学院では、各研究科の専門学術分野で基盤となる知識、研究遂行能力、論理的思考力、課題解決能力を身に付け、当該領域のプロフェッショナルとなる力を磨きます。同時に、修士・博士課程を修了する大学院生が、将来、アカデミアであれ産業界・官公庁であれ、社会で広い視野をもち、リーダーとして活躍するためには、専門学術以外にも素養として備えておくべき事柄があるはずで、このような観点から各研究科の意向を調査したところ、「社会的素養」、「情報能力」、「国際性」を多くの研究科が挙げられたことから、その要望をベースに全学共通教育科目が企画立案され、平成 30 年度より、次の 3 分野で大学院生を対象に開講されています。令和 3 年 10 月からは、国際高等教育院に代わり大学院教育支援機構において大学院共通科目が開講されています。なお、大学院共通科目は、学内の研究科、研究所、センター等の部局からの提案により開講される場合があります。

① 社会適合分野

大学院での研究活動を行うにあたり必要となる基盤的知識、ならびに大学から現代社会に飛び立ち活躍するた

めに素養として必要な知識を養成する科目

② 情報テクノサイエンス分野

IT 社会において必要とされる情報処理能力を学ぶ科目

③ コミュニケーション分野

国際的に活躍するためのコミュニケーションスキルを身に付ける科目

大学院共通科目群の科目は大学院生が履修し合格すれば単位が与えられますが、所属する研究科において修了要件の単位として認められるかは研究科により異なりますので、前もって所属する研究科・専攻において確認してください。

⑩大学院横断教育科目群

大学院横断教育科目群では、各研究科が開講する科目のうち、他研究科学生の履修に配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、または多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目が提供されています。

なお、平成 29 年度まで全学で実施されてきた「研究科横断型教育プログラム (A-Type、B-Type)」は廃止し、平成 30 年度から「大学院横断教育科目群」として上記の要件を満たすことを確認した上で、国際高等教育院が取り扱うことになりました。令和 3 年 10 月からは、国際高等教育院に代わり大学院教育支援機構において大学院横断教育科目が開講されています。

これらの科目も合格すれば単位が与えられますが、修了要件の単位として認められるかは、前もって所属する研究科・専攻において確認してください。